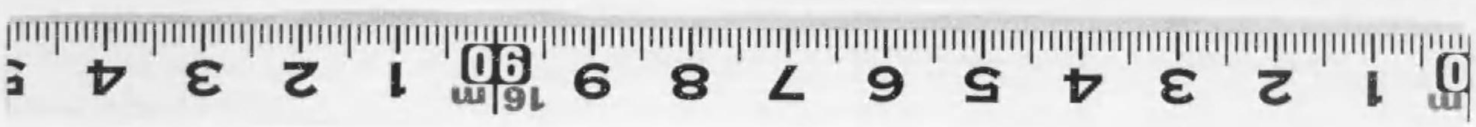
526
137

部



亡國行

別題

内膳と勝頼

中島清著

大正
13. 11. 15
内交

1924

東京

聚英閣

529-137

曩に『中央公論』（大正十一年夏期増刊號）によつて發表したものであるが、今匡單行の書として世に公にするに方り、新たに多少の修正を施した。

大正十三年九月

中島清

——禁無斷興行——

此作の發表前後に引續き世を去りたる我が兒政子、我が妻富子兩人の靈に捧ぐ

作者

三幕物
戯曲

亡國行

（別題、内膳と勝頼）

第一幕　浪人小宮山内膳

主要人物

小宮山内膳正友信（三十六七歳）。
その弟又七郎（三十歳前後）。
又七郎の妻皐月（二十二三歳）。
右兩人の息子國若（五六歳）。
荒木源八郎（二十八九歳）。北條家の臣。
その他百姓作平、条吉、樵夫吾八、治助（これは内膳と同格の武田の家臣秋山攝津守の被官）、逃亡兵、避難民等。

時

天正十年三月三日、夕方前より夜に入る。

所

甲州の或る片田舍、內膳佗住ゐの家附近。

幕のあく少し前より、舞臺では三味、笛などの混つた賑かな歌ひささめきが、見物席より向つて右奥の方で聞えてゐる。その合間々々には、左の方で稍や低い讀經や念佛の聲。讀經や念佛が止むと、程なく幕があく。

舞臺は甲州の或る山地より平野へ出る川沿ひの田舍道。川は舞臺の奥を左より右へ流れ、岸より道までの間には所々に二三株の桃が花咲き、その下は畑の樣になつてゐるが、又野生の灌木が所擇ばず多少斷續してゐる。川の下手の彼岸には大勢の男女が桃見の宴を張つて、陽氣に騷いでゐる。中に武士らしいものが二三名、振舞ひの主人らいのが一名（それが治助）、それと見分けられる。

ずつと左に寄つて、直ぐ川に臨んだ所に　見すぼらしい藁葺の家があり、殆ど骨ばかりになつた破れ障子、土の剝げ落ちた壁などが、慘ましく人目を引く。

背景として遙かに巨摩郡の地藏岳、鳳凰山、駒ケ岳等の連嶺が見渡され、又その右稍や近くに帶那山の餘脈の裾と接して、古府（今の甲府市の直ぐ北）の町が仄かに眺められる。

二三分經つて、舞臺稍や廻り、左手のあばら屋が殆ど正面に來る。遠景の連山の位置は殆ど少しも變らない。古府の町も矢張り右の方に眺められる。家は壁土も大分剝げ落ち、柱も隨分傾いてゐる。屋內は上座と覺ゆる所に二枚折の薄汚い屏風が彼方向きに逆に立てあり、その彼方より二筋三筋、線香の煙が靜かに細く立昇つてゐる。其他に家具と云つては若干の本箱と二つの鎧櫃、それから長押に二三本の槍や薙刀がかけてあるばかり。骨のみの樣な障子の外側には、朽ちかゝつた狹い椽が、右側だけに附いてゐる。

酒宴の場は次第に終りに近づき、程なく三々伍々と引上げて行く。

一

內膳（椽に脊を向け、柱に心もち靠れながら坐り、腕を拱いて哀傷の態。時々深い溜息を洩らす。着物はひどい襤褸。體格も風采も元來は立派な堂々たる男らしいが、痩せ衰えて、顏にも血色が全く無い）。

又七郎（ずツと前方に坐り、時々顏を上げて何やら話しかけようとするが、又自分でもそれを抑へ、靜かな敬虔な心持を續けようと努める。兄ほどには痩せてゐないが、顏色は同じく惡い。着物も同じく襤褸）。

國若（父又七郎の傍に行儀よく坐り、時々兩親や伯父の顏を見てゐたが）。お母樣、私はお腹が空きました。（父より屹とした無言の顏で見られ、又ぢツとおとなしくなる）。

羣月。（痩せてゐる事、着物の粗末な事、良人や義兄とほゞ同樣。少しく下の座に坐り、時々顏を拭く）。幾度も云ふ樣でムりますけれど、どうしても本當とは思はれませぬ。あの樣なお優しい嫂上樣がお亡くなりなさる道理はムりませぬ。夢とより外には思はれませぬ、今に覺めさうな氣ばかり致します。それであるのに、何故まだ覺めないでムりませう。あゝ、私の看病が少しも行き屆きませなんだ爲め……。（急に又何やら思出して悲しさに堪へかねるらしく顏を被うて靜かに立ち奥へ入る）。

內膳。其樣な事を云はれると、拙者が苦しい。たうとう醫者にもかけず死なせるなぞと、何たる事ぢや。（短い間）拙者の樣な不運不德な者の所に、何の因果で彼女は嫁入つて來た事やら。

又七郎。（慰める）。人間の深い離合が、此世の僅かな運不運ばかりで定まるものではムりますまい。如何に當世が輕佻浮薄で、正しい者ほど愈よ窮する習ひとは申せ、現世以上の强い深い結合を、どうして誰が全く否み得ませうぞ。

國若。（泣き出し度いらしい顏を上げて又七郎を見）。よ、お父樣、私はお腹が空きました。

內膳。（爽かな顏つきを裝ひ、國若に）。いま少し待つてお居で、もう直ぐ食べるからな。どうぢや、少し外に出て遊んで來ないか、好い子ぢやからな。

國若。はい、それでは遊んで參ります。（ちよこちよこと小走りに奥へ行き、母親に向つて）お母樣、私は遊んで來ますから、歸つたら直ぐ御飯を食べられる樣にして置いて下さい。

皐月の聲(奥より)。あいよ、それではおとなしく遊んでお來で。川岸なぞへ行つてはいけませんよ。

國若。はい。(と表に出て、左の方へ小股に可愛く走つて行く。)

又七郎(前の慰めの言葉を續ける)。醫者を呼べませなんだのは、拙者としても今に殘念でムりまするが、それ程の大病であらうとは、嫂上御自身さへ思うてをられませなんだし……。

内膳。さやうさなあ、飢ゑや餓ゑは病氣の部類には入るまいて。醫者を呼ぶ金がある位なら、それだけ食物さへ取らせて置けば、なんの彼女とても、まだまだ死なずに濟んだであらう。

(短い間。考へるのを避ける樣に)したが、過ぎた事ぢや。して此の次の順番は、此の内膳か。

又七郎(聞き咎める)。それは兄上、あまりと云へば意氣地ないお言葉。(次第に憤激し來る)兄上が斯樣に零落なさるなんぞと、我々が斯樣に落ちぶれるなんぞと、して世間の虫けら共が時を得顔に、醜と惡との限りを盡して、榮えに榮え行くなんぞと、滑稽と云はうか、何と云はうか、いやはや、全く以て言語道斷。(憤激の極、言葉も出ず、たゞ口の邊りを少し顫はせる)。

内膳。醜でも惡でも、榮える者には力があり、滅びる者には、たゞ衰弱があるばかり。强がりでなく、打明けて云へば、もう拙者は、實際かうして坐つてをるだけさへ懶く、此の襤褸さへが、鎧でも着てをる位に重いのぢや。

又七郎(悲憤の情を押し隱してゐる。默)。

内膳。妻の看護に來て呉れたそなた達夫婦の厚い志、決して内膳は忘れはせぬぞ。したがな、又七郎、もう今日で初七日の法事も濟んだからには、歸つて呉れる方がよい。此のどん底の貧乏ぐらしを、此上なほも相伴致して呉れるのでは、拙者は愈よ申譯が無いわい。

又七郎(輕蔑する樣に兄の顏を見つめ)。何、申譯? えらく水臭いお言葉をお聞かせ爲さるでは厶りませぬか。

内膳。何が水臭いものか。我々夫婦の此世の命は、もう半分が缺けたによつて、殘るは渚のうつせ貝ぢや。そなた達夫婦はさうでなく、して國若といふ立派な芽さへが出たではないか。その國若にまで飢じい目を見せる拙者の心の苦しさを、そなたはたゞ、伯父甥の間の義理からとでも思ひをるのか。(短い間)六年前に松枝の城中で、お亡れなされた母上の最後のお言

葉、そなたもさぞか忘れてはをるまいがな。

又七郎(追懐して涙ぐみ)。聖者の様なお顔をば、微かに此方へお向けになり、全く思ひがけもなく、『國若は？』とお尋ねになりましたなあ『まだ國若は參らぬか』と。

內膳。生れたら命けるとおきめになつてをつたる孫の名を、まだ生れもせぬ中になあ。いや二人ともまだ女房も無かつたに(間)おい、又七郎、血統の斷絶を怖れる親の心の切なさ、をそなたは何と心得をるぞ。いや、そなたよりも此の內膳が尙ほ一層。不孝のし續け、逆らひ續け。

又七郎。御臨終の時のあの母上のお心の程、思へば拙者も腸が斷たれる樣にムりますわい。國若に注がるゝ兄上や拙者等の愛も、つまりお亡れなされた御兩親の愛に相違はムりませぬ。

內膳。愛といふものが、幸か不幸か我が日の本では、橫に同時代に廣がる筈の持前を、種々樣々の事情により、壞きとめられてをる爲めに、勢ひ過去より未來へと、ひたすら縱に續くやう成つてをるのぢや。これは孰れが良いにしろ、惡いにしろ、急にはどうにもならぬわい。(短い間)まあそれは兎まれかくまれ、生ひ立ち盛りの國若に、此の伯父が、ひもじい思ひをさせてよいか。あゝ濟まぬ、濟まぬ。

又七郎。勿體ない、そ、それ程までに……。(感謝の餘り、言葉なく、涙ぐむ)。

內膳(自分を嘲る樣に)。此の內膳の樣な者に、何を勿體ないと云ふのぢや。そなた達夫婦や子供に對する拙者の愛が、まだ本ものである今の中に、早く出て行つて呉れる方が、兩爲めであるを思はぬか。

又七郎。何に對する兄上の愛にもしろ、それが本物でなくなる折でもある位なら、さやうな兄上であるならば、どうして斯程に兄上も零落なさる道理があらう。

內膳。それは惠林寺の快川和尙殿にでも當嵌めて云へば云ふべき事。此の內膳を買被るな。身內の者を買被るのは、汚い中にも汚い自慢。(次第に愴然として)餓鬼道の苦に責められると、どの樣な事でもしさうな此の內膳ぢや。(氣を紛らす樣に)あゝ、いや思ふまい、思ふまい。

又七郎(兄の顏を見詰め、無言)。

二

(粂吉、作平、吾八の三人、右の方より登場、軒さきで一寸先きを讓り合ふが、直ぐ引續

き入る。)

条吉(幾らかおづおづとした調子で案内を乞ふ)。御免下せえ、お頼み申しやす。

又七郎(取次ぎに出る)。条吉とやらに、次は作平とか云ふ名であつたな。何の用かの？　その若いのは？

作平(吾八に代り答へる)。へえ、先に内膳様に本を敎はつてゐやした者で、吾八といふ樵夫でムえやすだ、へえ。

条吉。で、三人で些と内膳様にお話致し度え事がムりやすで、へえ、ちよツくらお目にかかり度えと思ひやすだが。

内膳(吾八といふ名を聞き、坐つた儘で少し懐かしさうに呼びかける)。おう、吾八か。暫くぢやのう。此方へ上れ、三人とも此方へ通つて呉れ。どの様な用事か知らぬが、まあ上つて呉れ。

(三人は上つて座につく。吾八は少々極り悪さうに、うなだれ勝ちである。)

作平。えゝと、その、今度は奥様はたうとうお宜しくなかつたさうで、へえ、どうもお氣の毒に存じやすだ、へえ。

条吉。まだお若えお年でなあ、ほんまに惜い事でムえやしただ。さぞお力落しでムえやせうなあ、お察し申しやすだ。

内膳(感謝)。其方たちもさう申し呉れるか、有難いわい。

作平(吾八に)。これ、吾八、お前もお弔みを申上げねえかよ。

吾八(機械的に)。お弔み申上げやす。

内膳(寂しい微笑を浮べ)。どうやら目つきが少し變つた様にも見たが、やはり以前の通り、ぶツきら棒の吾八ぢやな。む、それがよい。有難いぞ。

作平。ほんまに手前どもは内膳様の御不運を、お察し申して居りやすだ。お氣の毒に思つて居りやすだ。今度の事に限らず、なあ。そして手めえ共が今日斯うして參りやしたのは、實は又々お氣の毒な事ではムえやすだが……その、へえ……。

条吉。斯ういふ御不幸のなかに、又かういふ事をお耳に入れやすのは、手前どもも實は辛えでムえやすだけんど……。だけんど、筋道は筋道通りにしなきやなりやしねえでなあ……。(作

平に、稍や小聲で）お前云ひ出せよ。

作平。實は、その、何でムえやす、もう四年にもなりますなあ、內膳樣があの治助の長娘をお嫁にお貰えなさらねえてんで、秋山攝津樣と小山田將監樣とから訴へられなすつたのは、なあ。そして、たうとう浪人にお成んなすつただなあ。ほんまにお氣の毒でムえやしただ。ところであの時屋形樣は、たゞ內膳樣を浪人になすつた丈けではお氣がお晴れにならなんだと見え、只今の此の御家とお屋敷も、お取上げになりやしたツちふ事でやすな。

と攝津樣とに、お下しなすツたツちふ事でやすな。

內膳（冷かに微笑し）。面白い事を申しに參つたな。

作平（あせり出す）。いや、これはお忘れなさる事でもムえやすめえがな。それとも又は、攝津樣と將監樣とのお二人だけに、御沙汰がありやしたか知らん。兎も角も手前どもはお二人の爲め、今まで何かにつけて働えた事がありやすで、それでその、去年の暮に、此のお屋敷をお二人樣から戴いたツちふ譯でムえやすだ、へえ。

內膳。さやうな拙い御伽噺を聞く耳を拙者は生憎持合はせぬがの。（努めて爽かな氣持になり）それよりも、吾八、須川氏とやらの塾にては、只今何を學んでをるかな。

吾八（極り惡さを强ひて抑へ）。へえ、それは、その、孟子の素讀を始めやした所で、へえ……。（勇を鼓し）だけんど、作平の只今申上げやした事を、御伽噺だなんて、ひでえお言葉で……（どぎまぎし）そりや作り事ではムえやすだが……（作平に睨まれ、愕き怖れ口を噤む）。

桑吉。いや、手前どもは何も分らねえ田舍者でムえやすだで、別に證文も貰はねえでやしただけんど、其樣にお疑えなせえやす樣だら、（作平を顧み）一札貰つときやよかつたなあ。

作平。いんや、お心のお立派な內膳樣達に、其樣に證文を突きつける樣な事をするのは、無禮至極だて。俺等も其樣な面倒な事にや慣れてゐねえだからな。

內膳（半ば獨語、彼等を憫む態）。その樣なあさましい、又淺果な人間に、みんな成りさがり行きをるぢやな、むう。憫れな奴輩。

桑吉（一寸の間どぎまぎしてゐたが、氣を取り直し）。ぢやあ、內膳樣は手前どもが申上げるのを、嘘だと仰しやいやすだな。そりや餘りでムえやすだ。手前どもは村でも正直者で通つて來てやすで、へえ、まだ嘘なんぞついた覺えはムえやせんだ。（吾八の腰の邊を意地惡げに私

かに突き、低い聲で）手前、へまを云やがつて、畜生め。

作平。實は早く御相談しやせうかと思つてやしただが、何せえ奥様が病つてゐなさりやしたで、今までは遠慮して延ばしてゐやした様なわけで、へえ。

（此の時表の通りを右から左に、文箱様のものを持つた仲間らしい使の者、不安さうに邊りを見廻はしつゝ急ぎ過ぎ行く）

粂吉。内膳様がたをお氣の毒に思ふ手前どもの心に替りは有りやしねえだが、手前どもも年中貧苦に泣いてをりやすで、此のお屋敷でも戴けれあ、田や畑にでもして、どうやら女房や餓鬼なども育てて行けさうに思ひやすだ、へえ。

吾八。どうか手前ども三人にお呉んなせえやし、（粂吉と作平に、その機嫌を取る様な調子で）斯う云や好えぢやろ、なあ。

作平。折角戴きやしたのを、いつ迄も此儘にして置きやしては、攝津様や將監様にも相濟まねえ譯でムえやすだから。なあ、御舍弟様、あんた様からも、どうぞ好う仰しやつて下せえやし。

又七郎（彼等に對する輕蔑を辛うじて抑へつゝ）。嫌ひな女を娶らぬ爲めに訴へらるゝも珍妙なれど、それは兄上の場合事實であつたから仕方がないわい。又その揚句、浪人となつたも事實ぢや。さり乍ら、兄上の親讓りの家屋敷を、如何に勝頼公なればとて、無斷で取上げに相成る譯が何うしてあらうぞ。又それを假に秋山氏等が戴いたと致しても、さやうな戴き物ならば、其方どもにあの人達が呉れる道理は尙ほさら無いわい。（皮肉に微笑し）但し其方どもも勝頼公の寵臣とでも成り上つたか。

作平（どぎまぎしながら）。だけんど、だけんど、手前どもが貰つたに違えムえやせん。其様にお侍が百姓風情の者をおいぢめになつちやあいけましねえだ。

粂吉。まさか斯うたあ思はたかつただが、ああ、證文を貰つときや好かつただなあ。

又七郎。愚圖々々云はずに早く引退るがよいであらう。あまり無禮が募つた揚句は後悔せうぞ。

作平。取る筈のものを取らうちふのが、何で無禮でやすだ。お侍だちふて、あんまり威張るもんぢやありやしねえだ。

粂吉。よし、其様な御量見なら、俺等にも覺悟があるだ。なあ吾八、貴公から須川様と將監様

に云うて呉れ、俺は播津様と治助さんに相談するだ。誰だつて俺等に味方するにきまつてるだからな。

吾八（まだ多少きまり悪さうにどぎまぎしながら）。うん、須川様にだかね、さうぢや、仕方ねえ、須川様にでも云うてみるぢやぞ。

（以下少しの間、三人は何とか直接に内膳等の氣を挫いてやり度い様子であるが、内膳の平靜な、又七郎の屹とした態度に、何となく怖れを覺えるらしく、くやしがりつゝも自分達の間の會話にしてしまふ。）

粂吉（作平に）。おいらあ學問が無えだから、議論は出來ねえだけんど、貰つたものを取るのが惡いて理窟はあんめえでねえか、なあ。

作平。なあに自己流の學問しか無え様な人は、矢鱈に理窟を並べ度がるもんだて。あの須川様みてえに、幾らも免狀やら肩書やら持つてムるほんまの學者は、滅多に議論なんぞしやしねえだあ。

吾八。うん、そりやさうぢや、おら達もな、須川様の立派な免狀てのをどつさり見せて貰うただ、でツけえ印形捺してあつただからな。其様な事ぢやああのお方が偉えやなあ。

粂吉。ぢやあ行かうや。議論なんぞするよりも、村の若え强え男達にさう云はうでねえか、そして事の鬼をつけようや。

作平（内膳等に）。ぢやあ、お邪魔致しやした。

粂吉（同）。大きにお邪魔致しやしただ。

吾八（同）。せえなら。

（三人は口惜しがりつゝも、捨ぜりふの様にさう云つて立上り、家を出る。此時、國若左の方より歸り來る。）

作平（行き違ひさま國若を憎々しげに見て）。えい、この餓鬼め。——折角おいらが智慧を絞つた企らみも、……

粂吉（同）。物に成んねえ腹癒せだあ、此奴でも撲つてやれ。（と云ひさま、二人で國若の頰を平手で打つ。）

國若（よろけて倒れる。泣く。直く泣きやむが、さも無念さうにして内へ入る）。

作平、衆吉、吾八（皆急ぎ左へ退場）。

内膳（がばと跳ね起き走り出で、國若を掻き抱き、逃げ行く三人を一目睨むが、直ぐ又自分を制し、國若をいたはる）。おい、國若、どうした、どうした。虫にでも螫されたか、うむ、よし、よし。

又七郎（同時に走り出で、一時茫となつて三人を追はうとするが、やがて自ら氣を鎭め、國若を受取り奥へ連れ行く）。

三

内膳（座に戻り、其處に少しの間立つた儘、隅の方へ向つて腕を拱いてゐる。兩肩が顫へてゐる）。

又七郎（奥より出來り、もとの座に着くが、まだ昂奮を抑へきれずにゐる）。

内膳（以前の通りに向き直つて坐り）。又七郎、まことに以て拙者は濟まぬ。なほ是以上そなた方がゐて呉れゝば、どの様な災難をかけうも知れぬ。もう何卒早く歸つて呉れ。

又七郎（兄の言葉は耳にも入れぬ様子で、暫く無言。それから靜かに立つて奥へ行き。大小四五振の刀劍を持つて戻り來り、その目釘をあらためたり、紐を結び直したりしながら、半ば獨語）。肉身の不法な苦しみを、よそに見てをられる位なら、一旦家出までした拙者、何しに又も斯様な物を手にする身とは成りませうぞ。

内膳（又七郎が續けて云ひさうな言葉の方向を豫め轉ずる様な心持で）。もし松山の義兄上が今にお見えにでもなつたら、もう刀もそれだけになつたかと仰しやつて、お氣色が悪くなるかも知れぬがな。

又七郎。もう大丈夫お見えにはなりますまい。法事中にお見えにならずに、本當に幸ひでムりました。（稍や改まつた屹とした態度で、少し膝を進め）で、兄上、もうこれで嫂上の初七日も終りましたからは、愈よ先達てより申上げ置きました事、どうぞ孰れにかおきめ下さい。陸奥の伊達家に仕へる事にして下さるか、さなくば今一つの事をお許し下さい。

内膳（羨ましげに）。原田とかいふ伊達家の老臣は。嘸ぞ頼もしい人物であらう。

又七郎。當國でなら、先頃死なれた高坂彈正殿、馬場美濃殿といふ所でムりませう。そして拙

者は、丁度兄上が御勘氣をお受けなされた四年前、初めて安中の宿にて會ひ、拙者より話し出しも致しませぬに、向うから兄上の事、くはしく尋ねられたなど、何かの因縁とも思はれまする。足助城攻めの時の兄上の武功なども、ちやんと向うで知つてをられて、決して拙者に口先のみの愛想を云はれるでなく、心から感服の様子でムりました。それ故これから我々が頼つて行くならば、屹度よく世話をされるに相違はムりませぬ。これは拙者、命にかけて請合ひまする。

內膳。あの馬場殿は長篠で、あの様な落ちついた立派な討死をなされたが、あれとても矢張り高坂殿と御同様、先祖から受けた此國の將來を、思うて憤死なされたのぢや、悶死なされたのぢや。さり乍ら、あの様な憤慨や悶々の心の底には、矢張り切ない念願が滿ち漲つてをらぬであらうか、國家再興の念願が渦卷き立つてをらぬであらうか。所詮死んでもあのお二人、さぞ浮ばれぬ事であらうぞ。然るに我々兄弟は、さやうな切ない念願を、傳へ承け繼ぎ幾分でも成就させうの心はおろか、それを打棄てあべこべに此の我國を立去るのぢやと？

又七郎。すりや兄上は矢張りたゞ、高坂殿や馬場殿同様、憤死がお望みでムりまするか、悶死の御所存でムりまするか。その他には何一つ仕方は無いでムりませうか。高坂殿や馬場殿の切ない深い念願も、つまりは國內に善いまつり事が行はれ、上下一同幸福に浴する様にといふ事ではムりませぬか。それが如何にも當分は此の我國に於ては駄目。さり乍ら、未來永劫駄目ときまつてはをりませぬぞ。ところで其の駄目な當分の中に我々は斯うして卽ち餓え死致し、今に望みの光が見えようといふ段になり、其時こそ揮ふべき存分の力をば、揮ふ事が無いならば、そして折角の望みの芽をも空しく枯らしてしまふならば、それこそ永劫盡きぬ憾みではムりませぬか。我々は伊達家に仕へましても、子や孫の代になつてからでも、我々の願ひは叶ひまする。伊達家は今の主君輝宗公も、世嗣の政宗公も、たゞ徒らに我慾を以て戰ひをする様な人物ではないと云ひます。そして俠氣も情けもある人物と、拙者も確かに見てをります。それゆゑ兄上、どうぞ拙者の此の言葉、お用ひ下さい。

內膳。フン。あの楠公兄弟は、七度生れ替つて梟賊を亡ぼさうとか云はれたさうぢやな。さり乍ら、拙者は凡夫ぢや。外敵よりも、國內に時めきをる佞人揃ひの上下一同に對する憎惡が、憤怒が、此の心に煮えくり返つてをるのでな、子や孫の代になつて此國の爲めに盡さうなん

ぞと、さやうな悠長な心を以て此國を出る事に到底出來は致さぬぞ。（次第に熱を帶び、叱咤する樣に云ふ）拙者が此國を出るとすれば、此國を滅ぼす爲めぢや。かやうに腐れ果てたる國が、抑も何處に保たれ行くべき道理があるか。

又七郎。此の我國の將來を思ひ、死んでも浮ばれぬ先祖達のたましひを、打棄てては置かれぬと、つい今さき兄上御自身が申されたではムりませぬか。それゆゑ兄上の其の憎しみも、つまり切ない愛に基づくに相違は些かムりませぬ。

內膳。フン、當世の學者どもが云ひさうな口吻を洩すぢやないか。理窟ではさうかも知れんて、だがな、又七郎。端的の此の拙者の胸を、さやうな言葉の先きで以て擽る積りか。

又七郎。では其の憎しみからでも宜しうムります。此國を滅ぼさう爲め此國をお出になつてもよろしうムります。斯ういふ悲慘な、言語道斷な暮らしをなされ、無駄に御自分を滅ぼしておしまひなされて、それが抑も何になります。此國をお出になつた上では、乾度その憎しみは變ります。

內膳。何を云ふ。此の憎惡を遂げる爲めならば、（と一語々々に力を籠め）此の命も惜しうは無いぞ。

又七郎（半ば呆氣に取られ、半ば傷心の態で獨語）。國を治め民を育てる爲めならば、いつも命は投げ出してをらねばならぬと、あれほど平生云つてをられた兄上が、憎惡の爲めに命も捨てると云はれるなぞとは……。（悲痛に堪えかねる態）

內膳（稍や輕い調子になり）。それでは國を出て行かうぞ、そして伊達家に仕へようぞ。（少し笑ふ）なあ。そして、それから……

又七郎（訝りながらも嬉しさうに）。それでは愈よ、御決心がつきましたか、何より嬉しうムります。早速出發と致しませう。

內膳（弟には頓着なく云ひ續ける）。……して先方に着いたら匆々又引返し、今度は甲州征伐の先鋒として來るのぢやな。愉快ぢや、愉快ぢや。長坂跡部の幫間武士は物の數にも素より入らぬが、地位や門閥で威張り返れる穴山梅雪、逍遙軒、鼻先學問、えせ慷慨の山田出羽、扨ては隣岳、大熊備前、其外上下一同の穀潰しどもが、狼狽てふためき逃げまどふ樣子恰好、思ひやるだけでも溜飲が下りさうぢや。では行かうぞ。政宗公や原田殿に、よくそなたから

話して呉れ。

又七郎（面喰ひ）。……御、御冗談は……。

内膳。なに、冗談？

又七郎。さやうな譯には行きませぬ。さやうに早く此の甲斐の國を征伐に來るなんぞと、さやうな事が出來ますものか。

内膳（冷かに笑ふ）。隨分遠く離れてをる上に、今まで此國と何の和戰關係も無いからぢやな。又は伊達公といふ他の人の心をば、直ぐ此國の我々の爲め、すつかり向けさせる譯には行かぬと云ふ道理か。如何にも、如何にも。したが、織田や德川の國へ行くならば、さやうな譯にも行くではないか。フン、織田德川に降參せいか。

又七郎（多少兄の心を測りかね、たゞ何となく壓倒された樣な心持で、無言。間）。

内膳。伊達家にも降參か、なに、降參でない？　戰爭以外で他家へ仕へるは降參でない？　勝賴公が伊達家に仕へるならば降參なれど、我等が仕へるは降參でない？　勝賴公は君主であつて、我等はその臣下であるからとな？　然らば寧そ正直に、勝賴公は人間で、我等は人間以下とでも云つてはどうぢや。

又七郎（同前。間）。

内膳。フン、人間以下に甘んじて、此世に生れた甲斐があると申すか？　親は我等を人間以下のものとして、お生みになつたと思ひをるのか？　けち臭いちつぽけな君臣關係？　主從關係？　さやうな、現世だけの便宜の上の關係を、いやさ政道上の方便に過ぎぬ關係を、その大元に横はりをる人間同士の關係よりも重しと申すか、天地自然の道理に基づく人間同士の關係が、顧みられずなつたればこそ、地に墮ちてしまつたればこそ、今の此國の此の悲慘な運命が來たではないか。それゆゑ我等も天地の道理を蹈みにじり、人間以下にも何にも甘んじ、めでたく伊達家へ御奉公か。（愈よ人を壓する樣な間。それから調子を少し更へ）それともぢや、もし伊達公に果して大きい俠氣があるならば……（自分を叱る樣に）いやいや、馬鹿なつ。

又七郎。伊達公に俠氣があるならと申されますのは？　あればどうなさらうとの御所存でムりまするな？

内膳（諭す樣に）。をとこ氣なんぞと云ふには云ふがな、多くは虚榮に過ぎぬのぢや。虚榮でなく、どうしても止むに止まれぬ俠氣なぞと云ふものは、千に一つもあるものでない。虚榮でも何でも、それを此方で利用せぬのは損ぢやと申すか。フン、どちらが何を利用するやら、されるやら、知れたことか、ハハハハ。

又七郎（兄の言葉を飲み込みかねてゐる。深い溜息をつき、無言。それから屹として顔を上げ）。然らば兄上、やむを得ませぬ、長坂跡部等の醜類どもを退治の件、どうぞ御賛成を願ひます。

る。もし御賛成ないならば、拙者一人でも、やれる所までやらずに置きませうか。その爲め一命捨てようとも、それは素より覺悟の前。斯樣にして日一日と、ぢりぢり餓ゑ死して行くのが、一體何になりまするぢや。不平も憎惡も、その向ふ所へ向け、思ふ存分投げつけてこそ、何とか成らうでは厶りませぬか。

内膳。で、先づそなたは新府城の油蟲どもから片付けて行かうと云ふのぢやな。

又七郎。これが焦眉の急ではありますまいか。今度の新府城普請の遲延は、今迄の樣に、たゞ油蟲どもが勘定を誤魔化すとか、賄賂を取るとか、さやうの事のみが根元でなく、敵の織田や徳川に内通致せる毒蟲どもがあるからの事では厶りませぬか。さやうの奴等を拙者が三人か五人、巧く行つて十人なり二十人なり斬り捨てても、此國の上下一同が直ぐ目を覺ます事ともなりますまい。さり乍ら、兎も角も、それだけの效き目は確かにあるにきまつてをります。

内膳。信玄公の時代には、今の油蟲やら毒蟲やらも、まあまあ並の人間であつたがなあ。それが陽氣の加減とは云ひながら、斯うしてうようよと蟲になつて湧いて來たのは、可哀さうでもない事はないわい。

又七郎（性急に）。それは勝頼公の暗愚ゆゑにはきまつてをります。さり乍ら、急に勝頼公の心をば入れ替へて上げる事は叶はぬ業（わざ）では厶りませぬか。（苛立つて、扇みかけ）さやうな事を申されて、此の昨今の時勢をば、我々は傍觀してをられまするか。して我々も此の通り自滅を待つてをられまするか。

内膳。で、やるなら拙者の役目であらう。それをそなたが行ると申すか。國若の大切な生ひ立ちを誰が見るのぢや。國若には愈よ以つて餓ゑ死をさせる積りか。皐月殿も何となるのぢや。

(間)したがな、拙者はやらぬぞ。油蟲や毒蟲の退治で事が濟むならば、疾つくに拙者がやつてをるわい。蟲の湧く陽氣の元を放つておいて、蟲けらどもを拙者の相手か。馬鹿に致すな。——少し頭の内が熱くなつて來た。ちと風にでも當つて來ようて。(と障子をあけて椽より下り立ち、ぶらぶらと川の邊りへ歩いて行く。ともすれば足もと危く、物に躓かうとする)。

又七郎(刀劍をそれぞれに始末し、奥に納つた上で、又もとの處に戻つて來るが、腕を拱いて立ちながら沈思の態。時々深い溜息を洩らす)

内膳(ぶらぶらと歩いたり立止つたりしながら、その邊の景色やら、遠い彼方や此方やらを眺廻しなどする。時々一人で笑ふ。椽の方へ近く戻つて來た時、少し聲にさへ出して又笑ふ)。

又七郎(その笑聲を聞いて少し訝りながら、つかつかと椽に進み出て)。何かをかしな事でもムりますかな。此頃になく兄上の爽かな笑ひ聲をば聞きまするが。

内膳(一層蒼白く見える痩せた顔に、冷かな微笑を湛へながら)。いや、つい笑止しく相成つた。もう愈よこれで駄目ぢやな、愈よ甲斐の武田は滅亡ぢやな。斯うしてたゞ漫然と、拙者はあたりを眺め廻すに、何故といふ譯もなく、さやうな氣持がして仕方がないわい。これは神の告げかも知れぬ。

又七郎(兄の心を測りかね、心配さうな顔つきで默つてゐる)。

内膳。面白いものではないか、なあ又七郎、此の今の甲斐の武田は、上下一同擧つて此の内膳を滅ぼさうとしてをるではないか、現に斯うして滅ぼしてをるではないか、そして、内膳を滅ぼす事で以て、おのれは榮えて行きをる積りではないか。なあ、それがどうぢや。内膳を滅ぼす事が、取りも直さず甲斐の武田自身を滅ぼす事で、それで斯うして愈よ滅びて行くではないか。どうも實に、何とも云へぬ滑稽ぢや。悲痛の何のと云ふよりも、たゞ無茶苦茶に滑稽ぢや。ハハハハ……ハハハハ……。そして内に入る際に、又よろよろと倒れさうにするが、辛うじて自ら支へ、もとの座につく。)

又七郎(兄の心を飲み込みかね)半ばは呆氣に取られ、半ばは心配の態。兄が倒れようとする時、支へてやらうとして、却つて又躓かうとする。座につく。)

四

案内を乞ふ聲（家の入口の方で）。頼む。

内膳。松山の兄上ではないであらうか。

又七郎（出迎へる）。

松山景康（入り來る。兄弟は彼を上座に請ずる。彼は兄弟の痩せ衰へてゐる姿恰好を見て、今更の様な悲痛を覺えるらしいが、さりげない風を裝ひ、たゞ溜息を洩らす。そして、まだ座につかない中から）今日は妹の祝七日であるに、案内も寄越さぬ所を見ると、法事もせぬかと思つてな、少々不快でもあつたれど、別に些と大切な用事もあつたし、……やつて來たのぢや。そして途中で寺に寄つてみれば、墓に花など供へてあつて、掃除もしてあるし、香も上げた様子であるし、してみればたゞ此の景康だけを抜きにしたのかと思つた次第ぢや。

内膳（少し頭を下げ）。どうも悪う厶りました。坊様が招く錢が無いやら何やらで、つい兄上にも使も上げず……。

景康。さやうな事ではないかと思つた。それにも致せ水臭いわい。經は幸ひ（と又七郎を見て）そなたでも讀んで呉れゝばよかつた筈。一度は佛門に入つたそなた、袈裟など無うても、眞心の回向が何よりぢや。さり乍ら、斯様な事かも知れずと思ひ、儂の貧乏はまだ是ほどではないによつて、握飯を二三十作らして來た、精米も三升ばかり持つて來た。それに着物も儂の着ぶるしを二枚、一緒に入れて持參した。

内膳。度々どうも相濟みませぬ。經だけはお言葉通り、又七郎が昔の復習を致しましたぢや。

又七郎（景康が持つて來た包みを奥へ運び、皐月と二人で、その一部を屏風の彼方の佛壇に供へる）。

皐月（出て來て景康に挨拶し、自分の服裝を恥づるらしい様子で、又直ぐ急ぎ奥へ入る）。

景康。では儂も焼香を致さうわい。そなた方は握り飯でも食べて呉れ、腹を拵へて篤と聞いて貰はねばならぬ話があるのでな。（と立つて屏風の彼方へ行き、少しの間合掌念佛の態）。

又七郎（座に戻る。間。やゝ低い聲で内膳に）。何事で厶りませうな、松山の義兄上が格別に用事と申されてをりますのは？

内膳（それには頓着せず）。早く國若に食べさして呉れ。そなたも先きに食べて呉れ、皐月殿もな。

又七郎。兄上は？

内膳。拙者も後程。したが先づ、拙者の云ふ通りして呉れと云ふに。

又七郎。それではお先きに戴きまする。（奥に入る）

景康（屏風の彼方より出て來て、内膳に）。そなたは食事は相濟みか。食べ度うないか。

内膳（少し皮肉に笑ひ）。食べ度い思は山々なれど、此の……（と一寸云ひ淀み、それからきつぱりと云つてしまふ）詰り此の食べ度い思で女房を拙者は殺しましたでな……。

景康。何やら妙な激しい法ひ方をするではないか。

内膳（漫ろに愉然とする氣持で）。この七日の間にも、折にふれては然う思ひ、ひとりで妙に厭な氣持を覺えてはをりましたが、どうした譯か今日は取分け、變に斯う脊中に氷でも浴びる樣な氣持が致しますわい。たうとう醫者にもかけなんだのに、食物不足の彼女の病氣に、食物以外藥は無いとの理窟も立つが、その食物もやらず勝ちで……、詰り女房の分までも、此の内膳がひつたくり、食べてしまつた譯では厶りますまいか……？

景康。そなた達三人も食ふや食はずで、一心に看病してゐて呉れたでないか。なんの、なんの、あの妹だけに食べさせなんだ譯ではなし……。

内膳。どうせ助からぬものならば、長い苦しみをみせうよりとの、感じの鈍いげす婆でも思ひさうな心をば、此の内膳の此の胸も宿さなんだで厶らうか。穩かさうな體裁の蔭で、一日も早く一刻も早く死んでしまへ、何故死なぬかと願ふなぞとは、何たる人面獸心で厶りまするぞ。して内膳の此の胸がそれと果してどの位ゐ相違致してをりましたやら。（景康の前へにじり寄り、首を差しのべ）さ、兄上、彼女の爲めぢや、どうぞ存分の復讐をお願ひ申す。

景康（傷々しげに）。それ程までに自分の心を責めずともよい。そなたといふ人間は、儂にはようく分つてをる。（内膳の手を取り、感謝の態）そなたが一日も一刻も長く生き延び呉れることを、ひたすら妹は願うてをつた。今も妹の魂魄はそればつかりを願うてをるのぢや。これは儂が請合ふわい。それでも、そなたは、彼女の唯一つの願ひを、叶へてやらぬといふ氣かの。

内膳（自嘲・半ば獨語）。ほう、斯様な淺間しい此の内膳が生き存らへて、一躰何になるのやら。したが、死なずに濟むならば、淺間し序でぢや、ぐつと圖〻圖うしく構へませうわい。ハハハ。何が何やら一切分らずなつてしまうた（次第に瞑想に陷る。間）。

康景（調子を更へ）。まあ可い。時に内膳、そなたと平生大仲好しのあの穴山梅雪齋ぢやが、あれはな、愈よ今度叛いたらしいぞ。つい五六日前の事、さうぢや、二月二十五日の夜なかであつた、闇にまぎれて、女房子供殘らず引連れ、古府を逃げ出し、領地下山へ引上げたのぢや。

内膳（徐かに顔を上げ）。何、それでは愈よあの梅雪が、下山口より德川勢を導いて、押し寄せ來るのでムりまするかな。（まだ自分ながら少し信じかねる態）

景康。兎も角もその注進が行つたにより、勝頼公も諏訪の御陣を引拂はれ、まだ普請中の新府の城に　一時お立籠りと云ふ事ぢや。

内膳（朗え朗えしい生き生きした顔になり）。何でムるな？　諏訪の本陣をお引拂ひに相成つて、普請半ばの新府の城に？　そりや確かな事でムりますかな？

景康。儂が現に見て來たと云つ　もよい位ゐ確かなものぢや。それゆゑ此地の跡部大炊の親戚其他の者の邸にも、召出の急使が來てをる筈ぢや。して又仁科殿の高遠城も、防戰覺束ないらしいぞ。

内膳（さもさも心地よげに）。ほう、高遠城も危いとな？

景康。寄手は三萬以上であるに、味方はやつと、その十が一ぢやと云ふからなあ。して又後詰も牽制も、もはやすつかり望みが絶えたといふ事ぢや。

内膳（大きく深い溜息をつき、獨語）。あゝ、さう聞いて始めて此の胸が透くわい、透くわい。今夜こそは、いや今後はずつと、嘸ぞ熟う睡れる事であらう。

景康（たしなめる樣な口調で）。味方の不利をも悅ぶのは、その不利で以て、勝頼公始め上下一同の目が覺める事を、期して待たれるからであらうな？

内膳。勝頼公の目が覺める？　何の、何の、さやうな氣遣ひがありますもんか。萬々一に目が覺めても、もう取返しはつきますまいて。あゝ此の拙者の氣持好さ、何と之をば包み隱しておかれよう。あゝ好い氣持、好い氣持。

景康（呆氣に取られて內膳を見やり）さう露骨に悅ぶのでは、……困るでないか……仇に報ふるに恩を以てするといふ事さへもあるではないか。

內膳（輕蔑）。フン。

景康。それに、今日は儂はそなたには、或る好い便りを傳ふる爲めに來てをるし、なほさら以て、勝賴公に對しても、寬大であつて貰ひ度いのぢや。

內膳。フン。

景康。今日はそなたに他國への奉公を勸めるでない。（全く違つた爽かな口調になり）そなたも或は名前ぐらゐは聞いた事があるかも知れぬぞ、隣國北條家の臣下に、荒木源八郎といふ仁があるのぢや。

內膳。勝賴公の困窮を拙者が氣味よく思ひますのは、何が何でも變りは致さぬ。さり乍ら、お話が別の事なら、そりや其積りで承りませうわい。荒木源八郎殿と云へば、松田尾張守の手の者でムりませう、しつかりした人物らしいと、拙者もかねて推察致してをりますわい。

康。その荒木殿が今朝儂を、はるばる訪ねて來られてな、そなたに少し折入つて願ひたい事があるとの話ぢや。それでそなたに豫め儂が下相談に來たといふ譯でもないが、いや下相談に來たとしても惡くはないが、かういふ貧乏な暮しの所を、未知の他國人より出し拔けに訪ねられては、それこそ何かに都合が惡いも知れずと思ひ、兎も角一應そなたに前以て知らせもせうし、又儂も勸めはしたいと思うた爲め、それで斯うして參つた次第。

內膳。して、その願と云はれるのは？

景康。そなたに敎へを受け度いと云はれるのぢや、軍學でも兵學でもなく、又必ずしも四書五經や國學たぞといふわけでもなく、たゞそなたの自己流に修めて來た學問を、そなたに就いて學び度いと、かういふ望みぢや。

內膳。拙者の自己流の學問を、誰に荒木殿は聞かれたやら？　拙者は自分を學者として觸れ出した事なんぞ、今迄についぞ一度もムりませぬに。

景康。そこが何ぢや、德は孤ならずぢや。此の甲州ではそなたが浪人となつた所以を、一般には、あの治助とやら云ふ者の娘を妻に貰はずと頑張つて、不法な訴人に打負けた、たゞあれだけの事とのみ思ひ込んでをるのであるが、荒木殿はな、どういふ仔細があつてやら、そな

たがあの訴人にあの様に脆く打負けたまことの譯を、知られてをるのぢや。あの三郎景虎殿を見殺しの一件で、そなたが勝頼公を散々に責め罵つたあの事に、荒木殿の思遣りは甚だ深く、又隨分と感服されてをるらしいわい。

内膳。思ひ遣つては呉れた事でもムりませうが、あれしきの事、何しに荒木殿が感服などを致されませうぞ。此の拙者こそ荒木殿に幾らも學ばねばなりますまいて。兎も角も。會つて話をしてみたいとは思ひまするぢや。

景康。程なく此處に見えるであらう。そしてな、そなた方四人を相模の自分の家に來て貰い度いと云はれてをるのぢや。荒木殿も裕福な身上ではあるまいが、我々よりはずつと樂な暮らしをしてをるとかで、そなたを迎へ、何やらかやら教へを受くれば仕合せぢやと、さやうに云うてをられるのぢや。(稍や低い聲になり)尤も、さうして行く中には、又七郎には北條家より出仕を勸めて來るでもあらうし、又七郎の身としても、長らく荒木殿の厄介に相成りをるは、心苦しい事でもあらうし、それゆえ其處をそなたは考へる事でもあらうがの……

内膳。いやいや、それは又七郎とても、北條家に仕へずとも、彼地でならば近隣の子供に讀み書きを教へても、獨り立ちして妻子を養ひ行けない事もありますまいが。(少し考へてから)さり乍ら、拙者が荒木殿の師となつて行く? しかも、何を教へるといふ取りきめも無しにかな? それ程までに荒木殿が拙者と同じ考を持つてをられる事であらうか? ……いや、兎も角も會つて話は致してみたい。

又七郎(奥より出て來る)。兄上、お先きに失禮致しました。

景康(内膳に)。會ふ前に腹を作つておくがよい。そして、儀が持つて來たあの着古しを着るがよい、その姿では少々極りが悪いからな。又七郎も着替へなさい。

内膳(しみじみと昔を懐かしむ様な口調で獨語)。七つ八つの柔順(おとな)しい仕合せな子供の頃の氣持がするわい。この内膳にもあの様な平穏和平の日があつたな。(と奥へ入る)。

又七郎(續いて着替へに又奥へ入る)。

景康(ぽつとした様な氣持で獨語)。珍らしくすらすら事が運びさうぢや。これで又味方の武運も輓回と來れば、一先づ心配も絶へるがな。(あきらめる様な調子)どうも勝頼公では困つたものぢや。

（表の道を右から左へ、町人風の男女三四人、息を喘ぎしながら來かゝる。）

甲。もう此邊まで來てれば大丈夫ぢやろ？

乙。いんや、いんや、もう一里ぐれへ逃げてねえと危ねえわな。だけんど隨分走つたで、足が疲れた。ちと緩り行かうや。

丙。あゝ怖ろ、怖え、新府城でぢやな、その逆張つ付けがあつたつちふのは？

乙。さうぢや、そして其の新府城も、又お引拂えになるツちふだ。愈よ負け戰かも知んねえや。

甲。なあに、一寸の事だんべ。ほんまに敵が寄せて來たんぢやねえだろ。

丙。其樣に高を括るだから、危え目に遭ひやすだよ。さ、急がう、斯樣にのろのろ歩いちやねられねえ。

（と皆々又足を速めて過ぎ行く）

景康（槍や薙刀の寂しくかゝつてゐる長押の方を、一寸眉を寄せて見てゐた彼は、又表の道の方の右の人聲に耳を欹てたりして、尙ほも暗い顏つきをする）。

又七郎（景康の着古しに着更へて奥より出て來る）。何やら表の通りをば、騷々しく喋つて通つた樣に聞きましたが？

景康　新府城もお引拂ひの樣なことを申して通り過ぎたかな、どうやら眞の事らしいぞ。

又七郎（緊張）。なに、新府城もお引拂ひ？

內膳（これも着替へて出て來る）。高遠も落城ぢや。

又七郎（內膳の顏を凝視し）。何と？　高遠が落城とな？　誰よりお聞きに相なりました？

內膳、松山の兄上が今さき申されたではないか。いやいや、兄上は、たゞ危いと申されたかな。したが拙者は、何故とも知れず、たゞさやうな氣がして仕方がない（腕を拱き一寸思ひ入れ）虫の知らせといふのはこれか、して此の拙者の虫の知らせは、どうも的中致したらしいぞ。愈よ總敗軍と相成つたぢやな。むう、愉快ぢや、愉快ぢや。

景康、又七郎（共に不安と非難に滿ちた目で內膳を見詰めながら、呆氣に取られてをる）。

五

荒木源八郎（表の通りを右より登場。風采堂々たる武士。内膳の住家を直ぐそれと見て知つたらしい様子で、その見窄らしさに一寸立止り、深い溜息を洩らしたりする。それから入口の方へ行き、案内を乞ふ）。御免下され。

景康。荒木殿の聲らしいぞ。どうりや、儂が……（又七郎が立たうとするのに先んじて出迎へる）。そら、案の定ぢや。この様な金殿玉樓であるにより、直ぐお分りになりましたらうな。

さ、荒木殿、ずつと此方へ。

源八郎（座に通り、一同にそれぞれ挨拶）。相模の國の住人、荒木源八郎と申す者で……以後よろしく御願ひ致す。

内膳。拙者が小宮山友信、これは弟又七郎と申します者。何分よろしく……。

源八郎（痩せ衰へた兄弟二人の顏形を見るのがつらいらしく、少しの間顏をそむけて眉を寄せるが、又氣を取直して正しく向ひ合ひ）。御兩人とも御名前はかねて承りをり申した。そして是非お訪ね致し度い、御指導御示教を仰ぎ度いと、早くより志してをりながら、此の戰亂の世の忙しさ、思ふ様にもなりませず、殘念に存じ居り申したが、今度少しの閑が出來たを幸ひ、愈よ思ひ立ち、松山殿にお賴み致して、此の通りお目にかゝるを得ました事、源八郎何よりの仕合せに厶りまする。

内膳。その様な御丁寧なお言葉を受けらるゝ友信では厶りませぬ。友信こそ貴殿に就いて御示教を受くべき所と存じまするぢや。

源八郎。松山殿にもお話致しましたる通り、拙者は只今北條の臣とし申す儀にては厶りませぬが、先年勝賴公の戚後喜平次（上杉景勝）方へ御左擔なされし一件に就き、貴殿が萬事を差し置き極諫なされし義心に對し、一個の人間源八として尊敬の念、抑へる事が出來申さぬその他にも尙ほ、遙かに聞き及び敬服致し居ります事、少々では厶らぬが、何よりも先づあの一件につき、源八が感謝の微意、お受け下され。

内膳（首を垂れ）。さう云はれては、如何に鐵面皮な拙者とても、何の面目次第が厶らう。あの諫言のしかたとても、惡かつたに相違ないからこそ、此身は勘氣を受けながら、何の効き目

もなかつた次第。それに引きかへ貴殿こそ、あの笠原新六郎殿が當武田家へ降參の時、言葉を盡しお止めなされたと申す事ではムらぬか。それにも拘らず笠原殿はついに空しく降參の事とはなつたが、貴殿の諫言のなされ方には、ちやんと禮節に適つたまことの威儀があつたればこそ、笠原殿の實父たるあの松田尾張殿さへも、今に貴殿を褒められをると、承つてをりまするぞ。

源八郎。それは、その、斯う申しては憚りながら、勝頼公の暗愚な事、北條方の蒙昧　より尚ほも上手でムつた故。

内膳（低や聲低く）。それをさうぢやと思ふのは、拙者如何にも不快で仕方ムりませぬぢや。

源八郎（氣の毒さうに）。不快ではムらうが、それに相違はムりますまい。

内膳（默）。

源八郎。御心中お察し申す。

（間。）

内膳（自分を責める樣な嘲る樣な調子で）。いや、いや、拙者内膳こそ、禮節の精神など到底分らぬ下根の人間。さればこそ勝頼公に對しても、いまだに許す心が持てませず、今度の戰爭にも、武田方の敗北を聞き、好い氣持こそすれ、さらさら無念ではムらぬて。

又七郎、景康（共に呆氣に取られ、非難を眉宇に漲らして内膳を見てゐる）。

源八郎（深い同情を寄せ）。如何にも、如何にも……。したが其のお心の底には……。

内膳。跡部、長坂、それから梅雪、出羽其他を、拙者は隨分罵つたれど、拙者も彼等と五十步百步のやつぱり小人。たゞ小人振りが違ふ位なものでムらう。（自分を嘲り笑ふ。間）。で、御來意は、義兄より先ほど聞き申したが、かやうな友信と御承知の上、なほも御世話を下されませうか。これでもお世話下さるならば、どうせ厚顏な此の友信、辭退致さず、早速參上としませうわい。

源八郎。その小宮山殿で結構々々。その小宮山殿は、言葉と心と、又その心の表面と奥底とが、やゝともすれば大きに相違の御人物。然らば早速只今より御同道が願はれませうか。

内膳。少しの間ぼんやりしてゐる。氣乘りのしない機械的口調で）。只今より御同道致しませうわい。

又七郎（兄に）。愈よ御決心なされましたか。何より嬉しうムりまする。いろいろ申上げ度い事もムるが、話はゆつくり途中でも出來る事なり……（立つて奥へ行かうとするが、又何となく兄を氣遣ふ樣子で、行きかねる）。

景康。これで儂も安心と云ふものぢや。

源八郎。なほ念の爲め申しまするが、今日午の刻過ぎ頃、拙者が宿を立つ迄に耳に入りました所では、信州高遠落城の報により、新府韮崎の城中も城下も、上を下への騷ぎぢやさうにムりまするぞ。或は新府も早速お引拂ひに相成るとやら、既に古府にお着きになつたとやら、又なる所とやら申しをりましたぢや。お國ぢゆうの各地の武士達に、お呼び出しの使は頻りと發つたさうなれど、集る者は殆どなく、折を見ては背き去る者ばかりと云ひます。拙者が此方へ參る途中に於ても、逃走人めく多くの者を見受けましたぞ。

景康。儂が參る時も、避難者らしい平民どもには、如何にも逢つたぢや。

內膳（何となく自失の態。漫ろに少し拍子をつけて寂しく獨語）。ほう、背き去る者ばつかりで退却、退却、また退却。

源八郎（念を押して確かめる樣な表情で）。斯樣なお國の有樣でも、もとより小宮山殿は拙者のお許へお越し下されませうよな？さりながら、同じくお越し下さるからは、何もかもさらりとお諦めに相成つて、勝頼公その他の上下一同に對するお憎しみからでなく、あつさりとした爽かなお心よりしてお越し下さる事の方、なほ願はしいと思ひまするちや。

景康、又七郎。（共に源八郎の言葉に熱心に贊成の顏つきで、內膳の顏を見詰めをる。）

內膳（源八郎に）。まだ御存知はないかも知れぬが、詮ずる所拙者の學は、荀子の人間性惡說と、孟子の性善說とをば、どちらも同等に深く強く肯ふ所に根ざせるばかり。ところで其の惡を矯むる事も、善を育み養ふ事も、なかなか出來ぬが拙者の病ひ。まことに以てお恥かしうムりますわい。勝頼公を憎む心も、諦めたいもの、棄てたいものとは思つても……。

源八郎（聞。何か思出し、次第に激し來る）。いやいや、そこは拙者も御同樣。さうぢや、お越し下さる御決心は、どうしてお出來になつてもよいわい、勝頼公を憎まれる其お心からでも何でもよい。他國人たる源八郎すら、憎惡の情が込み上げますわい。新府のお城の評定で、抵抗力も何も無い人質一千人中より、所謂忠義の者の妻子眷族僅か百人を除く外は、すべて

人質曲輪に追ひ込まれ、燒き殺されたと聞きましたぞ。殊に木曾義政の母親並びに妹には、城の追手の勝山口で、どうでムらう、逆張付けの酷刑を加へられたと申しまするぞ。如何に今度の戰爭で最初に反いた者どもの血緣肉身なればとて、何も知らざる孱弱い憐れな女子供に、抑も何の罪科がムるのぢや。

又七郎（痛憤の態）。あゝ、さう聞いても、疑ふ事すらならぬとは、何たる情けない我等であらう。今になつても勝賴公はお目が覺めず、さやうな卑劣な殘酷な……。

景康（同じく）。それで國家が滅びずば、桀や紂の戒めが何ぢや。

內膳（頭に押ツ被さり來る黑い靄でもしきりに搔きのける樣な痙攣的な手つきをし、殆ど泣き出しさうな哀願の態度で）。もう、もう、どうぞ其事は……。それよりも、その結果をば云うて下され、臣下離散の事を云うて下され。（自分で代りに云ふ、前の通り自づと少し拍子をつけ）……呼び出しの使は四方へ行つたが、集る者は一人もなく、反き去る者ばつかりで、勝賴公は思案投げ首、次ぐに退却又退却……。あゝ、これでこそ胸が透く。（周圍に對する體裁をもいつしか忘れ）此の四年が間といふもの、拙者は生き埋めになつてゐて、もう愈よ窒息といふ所であつたに、今となつて何處からか、かすかに息がつかれる樣になつて來た。これは夢であらうか、どうせ人生は夢ぢやといふが……。あゝ、さり乍ら（音を延べ）變な氣持ぢやなあ。

又七郎（心配さうに兄を見て）。兄上を窒息させうとした御自分のその憎しみが、少しでも引き退つたならば、これに越す悅びはムりませぬが……。

內膳（我に復り）。いやいや、からだ具合で氣が少しぼんやり成つた所爲に過ぎぬわ。何ぢやと？　拙者の憎惡が引き退つたと？　馬鹿を申すな、進んで突きに突き破つたわい、突き破つて息づいてをる所でないか。あ、少し眩暈がする樣ぢや。（源八郎に）荒木殿、失禮ながら少しく風に吹かれて來ますぢや、暫くお許し下されい。（と云つて椽から下りたら、又ぶらぶらと川の邊りへ歩いて行く）。

源八郎、又七郎、景康（三人とも傷々しげに內膳を見やる）。

內膳（躓きさうになつては踏みこたへ、歩き行く。ふと川岸に立止り、遙か彼方の一地點を凝視する。仄かに見える地藏岳と鳳凰山との間ぐらゐの薄邊りと覺しき所に、煙

が一筋、かすかに立昇つてゐる。）

（表の通りを右の方から、又もや騒々しい人聲がして來るので、源八郎、又七郎、景康の三人はその方へ注意を向けつゝ）

又七郎（不安と悲痛の表情で）。扨ては愈よ兄上のお言葉通り……？

景康（殆ど同じく）。どうせ斯うなる外はなかつたか。扨ても扨ても。

（表の道を百姓町人等の老若男女が一群また一群、種々の包みなどを背負つたり携げたりして、後ろを見返り見返りしながら、右より左へ、斷續して急ぎ行く。皆多小息を喘ましてゐる。走つて行つてしまふのもある。手を引かれたり背負はれたりして、泣いて行く子供もある。雜兵らしい者も二三人づれで來るのがある。

さういふ避難民や逃亡者などが一寸途絶えた時、反對に左より右へ、先の酒宴の場の主人であつた治助と其の雇人三八、不安さうに話しながら急ぎ登場。）

治助（三八に確と云ひ含める）。ぢや、可えかな、須川様にもお逃げなせえツて云ふだぞ、な。跡部様の御親類達せえが、お呼出しのお使せえ來ただに、お逃げなさるだからな。さう眞接に云ふだぞ。そして娘は是非々々連れて來なきやいけねえぞ。（一寸考へ直して獨語）いや、おらが行かうか知らん、もし娘が愚圖々々すると困るだし。いんや、いんや、家の米だの金だのも心配でたまらねえ。（三八に）ぢや、確と頼んだぞ。えゝか、ぢや、おら家の始末をつけて待つてるだからなあ。

三八。えゝ、えゝ、大丈夫、お二人とも連れて來まさ、誰も命は惜いだから、須川様だてお逃げなせえやすだとも。ぢやあ、安心して待つてなせえよ。（と云つて別れ、右の方へ急ぎ行く）。

治助。ぢやあ屹度だぞな。（と念を押した上で、左へ引返しつゝ）あゝあ、かしら娘のあの彌生は、扨てどうなる事か知らん。奉公なんぞに何故出しただろ。（と半ば走つて退場）。

（雜兵三人又右より急ぎ來かゝる。）

雜兵甲。何？　下方彦作様が殺されたとな？

乙。もう此場まで來ればよからうな、此處まで追つかけては來ぬであらうし、少し緩り歩かうぞい。あゝ疲れた。――さやうさ、殺されるわな、勝頼公を臆病なんぞと、あの様に御前で

惡口しなさるからぢや。

丙。でも、全く以て臆病ぢやないか、まだ敵の旗さきも見えぬうちから、あの樣に退却ばかりなさるだもの。全くあの彦作樣はお氣の毒であつたよなあ。

甲。さり乍ら又、勝賴公も嘸ぞ心細い事であらう。毎日々々我々部下が、斯うして逃げ散るばかりぢやからな。

丙。勝賴公にも臆病神が憑いたと見えるて。

甲。そのくせ勝賴公は亂暴な事ばかりなさるでないか。あの立派な彦作樣を斬つてお捨てになるなぞとは、あんまり非道といふものぢや。

乙。臆病者は兎角非道な事ばかりするものぢや、そして愈よ部下は離れてしまふのぢや。

甲。して今は、古府の一條樣のお邸にお休みたされてをるのぢやな。まさか此方へお逃げではあるまいな。此方へでもお逃げになれば、我々は助からないぞ。

丙。大方鶴瀨の方をさしてお逃げに相成る事であらうぞ。あの小幡豐後の御老人が、さやうにお勸めなされてをつた。とは云へもうはや織田勢は、日野春から此方へ押しかけ來をるのぢやな。

乙。そして市川口からも、德川勢の旗先きが見えて來たと云ふではないか。(地藏岳の麓にあたる煙や〻盛になつてゐるのに目を留め、非常に怖れ愕き不安の態)。や、あれは敵の放火ぢやな。

甲(同じく大に愕き怖れ)。すりや韮崎ぢや、新府のお城に相違なし。

丙(同)。もう韮崎まで敵が寄せたか。

乙(丙と殆ど同時に云ふ)。愈よ怖ろしい事になつたぞ。急がう、急がう。さ、愚圖々々してはをられぬわい。

(そして皆々左へ走り行く。)

(程なく右の方古府の町からも煙が立ち始める。)

(さきの酒宴場に於ける武士の一人須川靜馬、その妻つる、三八の三人、それぞれに種々の袋だの包だのを擔いだり提げたりして、右の方より急ぎ來る。)

三八。え〻所で逢うて好かつた。さ、急がうや、急ぎやせうや。

靜馬。その菅笠を暫時の間貸して吳れ。(と云つて三八の菅笠を奪ふ樣に取り、內膳の家の方から見られない樣に頭を隱して、其邊だけは特に急いで走り過ぎる)。さ、急がう、急がう。や、古府もぢや、古府もぢや。

三八（古府の煙を見て、なほ一段と愕き怖れ）。た、たい變、た、たい變。(と云つて四人とも左へ走り去る。)

（日が暮れるにつれ、二ヶ所の煙は次第に赤くなり、勢も强くなる。遠くに人馬の騷ぐ音も聞える。又七郎、景康、源八郎、國若、皐月等、椽に出たり下におりたりして山の方を見やる。皐月と國若の二人も、どうやら着物を更めてゐる。二人と源八郎との挨拶は、表を逃亡兵等が通つてゐる時に濟んでのである。又七郎は又その間に鎧櫃を持つて來たり、刀や槍を揃へたりして、旅立ちの仕度をし終る。）

內膳（川邊の方より靜かに戻つて來る。全く死人の樣な顏である）。

又七郎。兄上、然らばもうはや、御出發なさるが宜しうムりませうぞ。今夜中にも行かれる所までは行かうではムりませぬか。さ、兄上。

源八郎。然らばいざいさ。御同道致しませうわい。

內膳（椽先きに立つたまゝ、腕を組んで默つてゐる。その片方の肩は痙攣る樣に顫へてゐる。吃りつゝ）愈よ、どん……どん詰りと相成つたか。あゝ、耳が鳴る。頭が割……割れさうぢや。國若を呼んで吳れ、國若を。あの頑是ない顏でも見たらば、少しは此の……。

國若（走つて來て內膳に抱きつき、心配さうに）。伯父樣、伯父樣、どうなされました、え？どうなされました？　まあ、其樣な怖いお顏をして……。あゝ、其樣に伯父樣はお苦しい？（と泣く）。

內膳（こみ上げて來る自分の切ない情を抑へつゝ、國若を抱きしめ、その顏をつくづく眺め）。むう、國若か、國若か、今更ならねど、おかくれなされた母上そツくりぢやわい、あゝ懷かしい。何といふ可愛い子供ぢや。此樣な可愛い子供をば、此の亡國の民として、……。むう、何をツ！　よいわい、よいわい。もう伯父は何ともない、一寸頭痛がしたばかりぢや。もう快くなつた。彼方へ行け、彼方へ。彼方へ行つて、おとなしくして居つて吳れ。(と國若を優しく

斥け、自分は顔をそむけ、幾度も深い溜息をつく)。

國若(伯父に取縋らうとしつゝ)。伯父様が苦しいならば、私は彼方へ行くのは厭。

皐月(國若を嫌しなだめて奥へ連れ行く)。

景康(不安と傷心に滿ちた目で内膳の顔をのぞき込みながら、無理にも何氣ない風を裝ひ)。然らば儂もお暇して、妻子を兎も角も少しの間、避難させずば相成るまい。浪人でも武士の片割れは、斯様な時は餘計な面倒があるのぢやからな。(恐れ憚りつゝ思ひきつて内膳を促す)さ、そなた達も……一刻も早く……出發致すがよいであらうに、……今夜の中にも成るだけ遠く……な、その……。

又七郎。(これも兄の深い心の底を忖りかねながら、促す)。さ、兄上。もう仕度は出來てをりまするに、……さ、兄上……

源八郎(傷々しげに内膳等の様子を見、默つてゐるが、涙が頻りに流れるので、後には顔をそむけてしまふ)。

皐月(内膳の前の椽の上に、袴などを置く。が、何故かひどく彈かれた様に、「あ」と微かな叫聲をさへ上げて恐れ退る)。

景康(自分の心を勵まして、なほ無理にも急き立て促がす)。さ、もう發たなくてはいかぬ。もう今更どうにも致し方はない。なあ、さうではないか。さ、もう發つがよい。では、儂は歸るからな……そなたも隨分たつしやにしてな……では、もう……これで、さ、さ……(これも彈ぢかれた様に、皆まで云ひ終へず、退る)。

内膳(依然として無言。肩は兩方とも激しく痙攣り顫へ、それが次第に烈しくなつて、波打つ様に見え、胸は底より覆へされ搔き亂されつゝあるらしい様子)。

(火勢はどちらも愈よ強くなり、古府の方より響き來る喧騒、ます〳〵高く大きくなる。

——幕靜かに下る。)

第二幕　駒飼の勝頼

主要人物

武田四郎勝頼（三十七歳）。

息信勝（十六歳）、先妻の腹。

松の方（二十五六歳）、勝頼の内室、北條氏政の妹。

おげん（七十歳に近い）、小山田出羽守信茂の母、腰元頭を勤めてをる。

彌生（二十五歳）、腰元、前の幕に於ける百姓治助の長女。

長坂釣閑（六十歳前後）、勝頼の寵臣。

跡部大炊助（六十二三歳）、同。

僧麟岳（五十歳）、武田家の菩提所大龍寺の住職。

土屋惣藏昌恒（二十七歳）、勝頼の近臣。

溫井常陸介（三十一二歳）、同。

安西平左衛門（同）、同。

亡國行

安部加賀守貞村（三十五六歳）、同。
小山田八左衞門（三十一二歳）、出羽守信茂の甥。
竹田左衞門行村（二十五六歳）、出羽守の娘婿。
石見儀助（五十歳前後）、駒飼の百姓。
間者小關彦太（三十歳前後）。
その他なほ腰元一二名、足輕、雜兵、百姓の風を裝うた出羽守方の兵卒等若干。

時

前の幕より六日後（天正十年三月九日）、夕方より夜に入る。

所

甲斐國東八代郡駒飼の民家、石見儀助の宅。

一

勝頼夫妻及び信勝の室に宛ててある座敷。正面に床があり、その上に「人和」と書いた額が少し傾いてかゝつてゐる。その右は寢室と腰元等の詰所へ行く出入口。前と左は庭に面して椽が廻つてゐる。

勝頼は座を離れて椽側に立ち出で、山の方を仰ぐ。內室松の方、信勝、それぞれの座に着いてゐる。長坂釣閑、椽側近くの末座に控へてゐる。

勝頼。なる程、なる程、此の笹子峠は天下の險路ぢや。今迄にも上州や武州を征伐に行く度毎に、此處は必ず通るにより、幾度越えたか覺えもせぬが、これほど險しいとは氣付かなんだ。さり乍ら、斯うしてぢつと眺めてをるに、我が領國內ながら如何にも急峻な山勢ぢや。大菩薩岳から大倉山、田野山と、蜿り蜿つて續いてをる具合はどうぢや。これでは京坂近くに育つた足弱ぞろひの織田勢なんぞ、見たばかりでも目を廻さずにはをられまい。ハハハハ。

釣閑。天險とは全くこれでムりまする。殊に愈よ出羽守の岩殿城にお立籠りとなりますれば、もう占めたもので、柵を結り土手を築いたり致してからに辛うじて戰爭をする樣な上方勢は、到底指一本でも觸る事は叶ひますまい。それに又鐵石の如き忠魂義膽の出羽守が守護致すのでムりますもの、織田德川は四日を出でず引返すに極つてをります。天の時に、地の利に、人の和、この三つが斯うも揃つてをりまするに、御武運の輓回が出來ずに何と致しませうぞ。

躊躇（感心の態）。かねて餘り好い仲でもなかつたあの出羽の事をば、さやうに其方が褒めるといふは、まことに以て立派な心。して又出羽の精忠には、全く以て感じ入るわい。樣子にはそれとも見せいで、いつも此身の事ばかり思うてをつて呉れるでなあ。此身も何がなあの出羽を悅ばしてやり度いものではある。

釣閑。親孝行なものであつて、君に忠を盡さぬものはムりませぬて。腰元頭を勤めをらるゝあの母親おげん殿を、出羽守がいつも思ひやつてをらるゝ心の程は、はたから見ても誠に心持よい美しいものでムりまするぢや。

（此の時、三十歳前後の旅商人態の男、前方の植込みの間より內の樣子を窺ふ。程なく其處を出て後ろへ廻り、左の木立の邊りから又しきりに見測つたりする。）

躊躇。むう、むう、如何にもさやうに相違なし。したが今日もまだ迎への使が參らぬ樣ぢやが、何と致した事であらうな？（と少し不安の態。が又直ぐそれを自分で取消し）いや明日は參るであらうな。何かと準備を致してをると相見える。（何か思出した樣な調子で座に復り、內室松の方に向ひ）時に、おげんと彌生とは、何やら云ひ爭ひを致した樣であつたよな。彌生は百姓の娘であり乍ら、不心得な奴ではある。如何なる事ぢやな。此身彌生に云ひ聞かせを致してやらう、して若し聞入れずば甚い目に遭はしてやらうぞ。此處へ呼べ、彌生を、此處へ。

松の方。まあ、その樣な、上樣がその樣な事を遊ばすなぞと……。ほんの一寸した女同士の言葉の行違ひでムりましたものを。彌生が少し急いで障子を閉めました音を、おげんが僻んで聞取つて、皮肉な口を利いただけでムりますものを。そしてもうそれも治まつたのでムりますものを。どうぞ其樣な事はお止し下さいまし。二人の今後も私が確かにお受合ひ致しませうに。

勝頼。いや、相成らぬ。蟻の穴より堤が崩れるといふ諺は何の爲めぢや。些細な事とて必ずしも打捨ててはおかれぬわい。治まつたものならば、なほも今後の心得を云ひ聞かせうぞ。これから岩殿に行つた上で、又さやうの事があつてみい、出羽に相濟むまい。此處へ呼べ、此處へ、おげんをも一緒に呼べ。呼べと申すに。よいわい、此身が呼ばうわ。（奥へ向つて呼ぶ）、彌生、おげん、おげん。おい、彌生、おげん。

松の方（呆氣に取られをる）。

彌生（正面右手の唐紙をあけて、靜かに入り來る。かたの通りに手をつき禮をする）。お召しでムりまするか。

勝頼。その方はおげんと云ひ爭ひを致したさうぢやな。どの樣な事ぢや。斯樣な國家の危急存亡の場合にあつて、不心得者め。次第を申せ、一切殘らず申せ。

彌生。何とも申わけムりませぬ。何でもないほんの一寸した事でムりました。そして、もう綺麗に仲直りを致しました程に、どうぞ此儘にしてお許し下されませ。

おげん（同じ所より入り來る）。お召しでムりましたか。

勝頼（軟かに）。おゝ、おげんか、その方は彌生と何か云ひ爭ひを致したさうぢやが、どの樣な事柄ぢやな。その方の樣に物靜かな年上の優しい婦人が、他人と爭ひなどをする筈はない。何か彌生が無禮なことでも云つたであらうな。

おげん（少し極り悪げに）。恐れ入ります、誠に誠に相濟みませぬ。全くほんの一寸した何でもない事でムりました。お耳に入れますのも恥かしい程の事、どうぞどうぞ、もうお許し下さいませ、この後は尙ほ謹みますでムりませう程に。

（勝頼は尙ほも二人に、次第を殘らず云ふべく再參促がすが、二人とも少し笑つたり、恥かしさうな樣子をしたりして、答へない。）

勝頼（拍子拔けがした樣な心持で、おげんに）。然らば其方はもう彌生に何の苦情も無いのぢやな、確とさうぢやな？

おげん。お言葉の通りにムりまする、少しも何とも思うてはをりませぬ。

勝頼（彌生に）。無論その方もおげんに云ひ分はあるまい。然らばよろしい、仕方がない、退れ。

おげんだけは少し殘つてをれ、ちと別に話をしたい事がある。

彌生。それでは御免下さいませ（と退場）。

勝頼（おげんに）。いや、決して決して叱るではない。今も今とて釣閑と話を致してをつたがの、その方の悴出羽守は、全く以て感心な武士。此身はいつも、出羽や秋山攝津などをこそ、まことの武士の手本ぢやわいと思うてをる。今度これから賴つて行くからではないが、何がな出羽の精忠に酬ひて取らせてやり度いとは、平生からの此身の所存。時にどうぢやな、出羽の長女は聞けば今年が十五歳、まだ誰にとも約束はしてないとやら、信勝の許嫁といふ事にでもして貰ひ度い氣はないか。その方は何と思ふぞ。

おげん（平身低頭して恐縮の態）。まあ、勿體ない、その様な、その様な……。如何に御冗談にしましても、勿體ないそのお言葉。

釣閑。あゝ、何たる有難い上様の思召しでムりますやら。我々臣下の分として、斯様なお言葉を承れば、たゞもう感泣の外はムらぬ。（とさも感泣の態）。

勝頼（おげんに）。いやいや、さやうに怖れ入るには及ばぬぞ、どうぢや、何と思ふ？　先づ其方だけの心は？

信勝（跳り上る）。ちえツ！　穢らはしい。父上、誰が抑も出羽風情の娘なんぞを貰ひまするぞ。出羽ぐらゐの機嫌を取るのも好い加減にして下され。さやうにしてまで臣下の者の機嫌　褄をお取りにならねば、岩殿に立籠つても御安心がならずとあらば、岩殿なぞへ行かぬがよいではムりませぬか。そして、これから、寄手の西軍へ斬り込まうではムりませぬか。恥の上にも恥を重ねて、蟲けらの様な命を盜み續けて行くよりは、潔く斬り死致した方が、どれだけ優しか知れませぬ。

釣閑。それは、憚りながら、若君の血氣の御短慮と申すもの。又御父上様のお言葉を、さやうに僻んでお聞取りになりましては、決して宜しうムりますまい。何の、何の、出羽守の機嫌を取るの何のと、その様な……。

信勝（みなまで云はせず）。何をほざくぞ、此の腰抜けの古狸め。貴様の様な奴が居つたればこそ、我が武田家も斯様な非運と相成つたのぢや。それを思はず、此の信勝を弱年と見くびり、忠臣めかした其の諫言顔……、うぬ！（と云ひさま、走り寄つて釣閑を蹴らうとする）。

勝頼（しかと信勝を引止め、たしなめる）。亂暴と勇氣とを、取違へてはなりますまいぞ。人の

和といふ大事な事を、そなたは打壞す所存かな？

信勝（辛うじて心を鎭め）。それが拙者には、却つて父上が打ち壞してをられますとより外思はれませぬ。如何樣に岩殿が要害堅固な名城であらうとも、又出羽が假へ精忠無二の勇士であらうとも、拙者は何故か、人の和なぞといふ事は、今の此の武田家には、到底得られぬ樣に思ひまする。それを父上は無理に作らうと急られて、實は却つて打壞してをられるとより外、此の信勝には思はれませぬ。

勝賴。愚かなことを云ふものでない。（獨語、低い聲で）それにも致せ、出羽よりの迎への使者は……いや明日は……。

釣閑（おげんに）。若君のお言葉は、何分血氣の云はせる事でムりますゆゑ、お氣に留めずに置いて下され。

おげん。あゝ、もうそれは申す迄もムりませぬ。信茂めが若君の舅になりますなんぞと、その樣な、……勿體ないと申すよりも、罰が當るでムりまする、はい。

釣閑。いや、さやうに謙遜なさらずともよい。何しろ上樣が臣下の者をお愛しみ下さるお心の程、ようくお察しなさるがよいて。それに又、あのお娘御は讀み書きは申すに及ばず、茶道生花、其他萬事に御器用で、また敷島の道をも既に辨へられ、お心ばえの美しさは素よりの事、若君の御配遇として……

信勝（たまり兼ねて又跳り上り、釣閑を蹴らうとする。勝賴しかと止める）。あゝ口惜しい！（と椽側傳ひに左へ、憤々して出て行つてしまふ）。

（舞臺靜かに左へ廻る）

二

（近從の武士の詰所。正面の稍や右に寄つた所に、奥へ行く唐紙障子。右は壁が一間ほど前へ來て、又その右前方に控の間の一部が詰所と續いてゐる。左と前方には土間が廻つてをり、なほ左は格子の外が村道、ずつと樹が繁つてゐる。右前方にも灌木が二三株。室内には櫃鎧だの弓矢だのが、それぞれの所に置いてある。）

（倦麟岳と跡部大炊助の兩人、膝を寄せて話し込んでゐる。）

麟岳。たうとう今日も岩殿よりの迎へは參りませなんだな。もう準備も萬端出來致してをりさうなものではムらぬか。

跡部大炊（稍低い聲で）。出羽殿が新府で上様にお別れして歸られてより、今日ではや八日にもなりまするがな。兵を集めなどする事も、上様をお迎へ致した上で集むる方が、却つて都合も好ささうなものでムるにな。それゆゑ實は上様がお待ちになるよりは、郡内岩殿の方よりこそ、早くお越しを願ひまするとて、催促でもして來さうなものではムらぬか……？　どうも拙者は何となく、少し不審に思ひまするて。

（以前の旅商人の風を裝うた忍びの者、木立の間に見え隠れつゝ内を窺ひ、話にも耳を傾け、熱心に聞き取らうとする樣子。）

麟岳。いや軍勢も、もう大分集つてをるでムらう、何しろ昔より郡内きつての名望家たる小山田家の事でムるでな。まさか出羽殿が病氣でもムるまいし、又病氣なら病氣と通知がありさうなもの。いや病氣にしてもお迎への使は寄越される筈であるに。（としきりに心配の態）。

大炊（相手の心を探る樣な顏つきで）。あの、貴殿は出羽殿とは、かねて格別御懇のお間柄でムつたな。何か出羽殿に、不意な事情でも起りさうな、其樣なお心當りはムらなんだか？

麟岳（不安さうに、却つて大炊に何か問ひ度げな顏つきで）。別に何の心當りもムらぬがな？

大炊（一段と聲を落し）。まさか出羽殿が、あの、心替りではムるまいな！（と云つて麟岳の顏を見詰める）。

麟岳。と云はれると？

大炊（前の通りで）。敵に内通、といふ樣な事はムるまいな？

麟岳（少し笑ひ出し）。ハハハ、さやうの事がムるものか。（一寸又考へる樣な風をするが、又直ぐ自分からそれを否定し）いやいや、さやうの事がムるものか。餘人は知らず、あの仁に限り、さやうな事は無用の御心配といふもの。

大炊。とは拙者も思ひまするが、上様の御義弟穴山殿さへ、徳川に内通なされた樣な次第で……。

麟岳（少しくどぎまぎし、云ひ遁る樣に）。いやなに、出羽殿は、えゝと、その……奥へ母御が腰元頭を勤められてもをりまするし、それに、その、……えゝと、かねて孝心深い出羽守、

さやうの事が出來よう筈はムらぬぢや。

大炊（幾　か安心する）。それはさやうでムつたな。むう、如何にもさやう。してみれば、よく
よく何か都合があつたでムるかな。

麟岳。と思ふ外はムらぬ。さり乍ら、一日も早くお迎への使者が參らいでは、どうも安心が成
りませぬわい。何しろ敵は、もうはや古府に陣を据ゑたに相違は些かムらぬでな。

大炊（無理にも自分の安心を確かめる樣な顏つきで）。む、然らば明日は參るでムらう。いや、
必ず參るに相違ない。ことによつたら今夜の中にも……。

麟岳。さうかも知れませぬわい。或はもう其邊に來かゝつてをるかも知れませぬわい。（何とな
くぞつとする）何が？　いや、お迎への使の者が。む、さうぢや。どれ、拙僧は一寸若君の
御機嫌を伺ひに參りませうぞ。（と立つて奥へ行く）。

（大炊一人、やはり思案を續けゐる。時々溜息をつく。又不安さうな目つきで邊りを見廻
したり、强ひて自ら安心したりしてゐる。――內も外も次第に暗くなる。）（戸外では旅商
人體の曲者の後ろを、少し前より溫井常陸、氣付かれない樣にそつと尾けてゐたが、曲者
が何やら一人うなづいて去らうとする時、つと進み寄り、その襟がみを掴み引倒さうとす
る。曲者はそれを振拂ひ、小さい荷など投げ棄てて、杖としてゐた仕込みの刀を引拔き、
斬つてかゝる。常陸は應戰し、少時格闘の後、曲者の刄物を叩き落して彼を取押へ、袖よ
り素早く綱を出して縛り上げ、家の內へ引立て入れる。）

大炊（たゞならぬ物音に愕き、物々しく大小を差して身を固め、氣色ばんで丁度出てみようと
する所で、常陸と入口ではたと會ふ）。おゝ、溫井殿、曲者でムつたな。

常陸（曲者を土間に坐らせ、大炊に）。御手數ながら跡部殿、外に散らばつた此奴の荷やら仕込
杖やら、一切こちらへ拾ひ入れて下さらぬか。此奴なかなか大力で、拙者がそばを離るゝ譯
には參りませず、して又荷にも何か秘密が潛んでをらうも知れませぬでな。

大炊（云はれた通り拾ひ集め廻る）。

彌生（物音を聞きつけ、奥より出て來る）。

土屋昌恒（外より戻つて來る、そして大炊に頓着せず詰所に入る）。

常陸（素早く彌生に、低い聲で）。彌生殿、今少しの間、此處へ上様が決してお出これ無き様、何とか巧く計らひ下され。な、頼みますぞ、屹度。

昌恒（同じく彌生に）。又この曲者の事を上様の耳に入れてもいけませぬぞ。あとで我々が上様には、如何様にもお詫びは申しまするでな。確かに頼みまするぞ。さ、早く、跡部殿が戻らぬ中に。

彌生。はい、かしこまりました。（と答へ奥に入る）。

大炊（仕込杖其他を拾ひ寄せて入り來り、曲者に）。大膽不敵の曲者め、よくもよくも覗ひをつたな（と云つて上席に坐り、審問でも始めさうに構へる）。

昌恒。拙者も先き程あの橋の手前で出會ひ、こやつ的きり怪しい奴と思ひましたが、果して僞商人の忍びの者でムつたな。

常陸（片手に綱の端を持つて、曲者の直ぐ面前に腰かけ、刀を鞘ごと腰よりはづして杖の様につき、曲者に）。さ、曲者、斬つても捨てず、危い目を見て取押へたは、織田方の云ひつけの一伍一什、白狀させねばならぬによつてぢや。

彌生（奥より又出て來る）。

大炊。時に温井殿、曲者を押へられたは貴殿のお手柄でもムらうが、上様を差措いての御糾問は、ちと僭上ではムらぬかな。拙者只今一應申上げに參ると致さう。（と立つて奥へ行かうとする）

彌生。あの、跡部様、上様ならば只今お庭の中門より、若様と麟岳様とお三人で、少し其邊を（と指示し）見廻りに歩くと申されまして、お忍びのお姿でお出かけになりました。

大炊（引返し、右の控の間の方へ來る）。なに、お忍びで……。（常陸と昌恒の二人に）然らば拙者がお連れ申して參るまで、御糾問はお控へなされい。

昌恒。承知致した。然らば、どうぞ。御老體御苦勞様。

（大炊は右の方へ出て行く。）

常陸（昌恒と顔見合せて、一寸笑ふ）。出て行きましたな。（彌生に）彌生殿、お手柄々々々、有難し（大炊が行つた方を見て）大切な場合に要らざる心配。まして上様に申上げて、肝腎の白狀をさせぬ中、短氣の上様、たゞ一刀に斬つてお捨てにでもならば、戰さの上に如何ほど

の損となるやら知れはせぬ。者生め！（と大炊の後ろから浴びせる樣に赤ん目をする）。

彌生（微笑む）。

昌恒。それにしても、彌生殿の氣轉にお禮を述べねばならぬ。（と云つて何となく一寸極り悪げな顏つきをするが、直ぐ又心を引締め）さ、溫井殿、始めませうぞ。こりや曲者、上樣お歸りと相成れば、其方の首は是が非でも飛ぶ。今の中に一伍一什を僞らず白狀すれば、我等二人の命にかけて、何とか工夫が無いでもないぞ。

常陸（彌生に座をはづす樣に目配せする）。

彌生（奥へ入る）。

常陸（曲者に）。さ、あり體に申して命が助かり度いか、但しは今直ぐ其の素ツ首を差のべるか、其方の好きな方にして遣はすぞ。

昌恒（赫と怒る）。何？　申さぬ？　我等が其方の一命を助けんが爲め、あの老人を出し抜いてまでも、格別な取扱ひを加へてをるに、白狀せぬ？（常陸に）然らば、斬殺してしまひませうぞ、仕方ムらぬ。

曲者（少し慄へるが、餘りには悪びれない。顏を上げて）命が惜しくないとは拙者も申しませぬ。さり乍ら、此場は助かりまするとも、どうせ御當家に勝利が有らうとは思はれませず、さすれば拙者はいづれに致せ、所詮は死なねばならぬ命數。同じく死ぬる位なら、節義を賣つて笑はるゝより……。

常陸（不安を強いて笑に紛らし）。節義も矢ツ張り算盤珠で彈き出したと申すぢやな。然らば商人に化けたと云ふより、それが即ち地金ぢやないか。して御當家に勝利はない？　然らば我等は其方の算盤珠にはかゝらざる損な節義を盡してをると申す儀か、ハハハハ、こりや面白い事を云ふ奴ぢや。

昌恒。あの老人の僭上呼はりに恐れをなし、我等だけでは其方を成敗致し得まいとでも高を括つてをると見えたり。（氣短かに）さ、溫井殿、やつつけてしまひませうぞ。（と云つて片足で土間を強くどしんと蹈む）。

常陸（やゝわざとらしく緩りと）。どうせ隣國の北條家へも幸ひ便りがあるに由り、何とか我々兩人で巧く計らひ、彼地相模へ、送つてやらうと思ひをつたに、其方の好むところは、相模

行きより地獄行きぢやな。好む所へ遣はしやらうぞ。(と云つて、妙に凄みを見せて靜かに刀を引抜く。)

曲者(常陸の顏に見入つてゐたが、次第に深く怖れ戰く)。いえ、いえ、白狀致します。北……北條様の御領分には、拙者の生みの母親が……あの、母親が居りまする、……あゝ、十年前に別れましてから今日まで……。いえ、彼地へお遣り下さいますならば、すつかり、白……白狀致しまする。有り難う厶りまする。拙者はあの、拙者は信忠様の御先勢瀧川左近様の組下の足輕で、小關彦太と申しまする、はい。三年前に御當國古府の飴屋に暫く奉公致しをりまして、此邊の事も何かと心得をりましたのが左近様のお耳に入り、それで斯様に忍びの役を仰せつけられ參つた次第に厶りまする、はい。そして、たうとう運惡く……。

昌恒。その忍びの役と申すは！

彦太(次第に落付いて來る)。第一に當方様の兵數がどの位であるかといふ事、第二に勝頼公がまことに此地に御滯在であるかどうかを究むる事、それから第三には、郡内岩殿の小山田出羽守様より、古府の信忠様の許へ、内通の使者が再參行つてをりまするが、その内通が果してまことのものであるか、それをまことのものと受け、一方は笹子口より、一方は石和筋より挾み討ちといふ計畫――はい、これは小山田様の方よりお勸めになつた計畫で厶りまする――此の計畫に應じてよいかどうかと云ふ事、この三ケ條を探る様にと云ひつけられ、斯うして參りましたる次第。そして又、小山田様の方の眞意が分らずとも、こちら様の現在の兵數が五百を超えずと見るならば、夜に入り次第、合圖の火をば擧げる様にと、さう云ひ含められ申した。

昌恒(不安の心を押し隱し、無理に笑ふ)。なに？　小山田殿が内通ぢやと？　して此方を挾み討ちぢやと？　ハハハハ。

常陸(同じく)。して織田勢の先鋒は、どこまで參つてをるのぢやな？　又その人數は？　三人か五人か、五千か十萬か、ハハハ、してそれは商人作りでもないのぢやな。……

彦太(常陸の出鱈目によつて一寸煙に卷かれ、稍やどぎまぎする)。はい、その……御先勢瀧川様と河尻様と合せて二千の上方勢は、石和、小松の邊に今夜は泊る手筈に厶りまする。はい、古府の信忠様の本陣は、五萬を少し越えて居ります。

昌恒。して、其方は我軍を凡そどの位と偵察致した？

彦太。失禮ながら、百人を少し出たばかりと見積りました。

常陸（彦太の觀察の鋭さに愕くが、さあらぬ態に、強ひて反語をさへ使ふ）。流石は忍びの者となるだけあつて、よくも目があいて居ることぢやなあ。又さやうな目あきの其方を忍びの役に使ふと云ふ瀧川とやら河尻とやらも、まことに以て、揃ひも揃つた目あきではある。ハハハ。

昌恒（これも無理に笑ひ）。然らば取押へるにも及ばなかつた樣なものぢや。取押へいで、合圖の火とかいふ奴を擧げさせた方が、よつぽど面白かつたらうかも知れないぞ。ハハハ。そして何ぢやな、その火の上がつた所を見れば、今夜中にも襲ひかゝつて來る手筈でもあつたかな。

彦太。素よりさやうでムりまする。

常陸（吐き出す樣に云ふ）。何ぢや、阿呆らしい。然らば、なあ土屋殿、その合圖をば我々が今夜擧げてやらうではムらぬか。瀧川なるかどぶ川なるかは知らざれど、まつた河尻にしろ縮尻にしろ、折角待つてをるであらうに、無駄を見せるも些か氣の毒。なあ、そして途中に伏兵の御見舞なりとも致さうか……。いや、こりやどうも面白いわい。

昌恒。よからう、よからう。稀には斯樣に面白い事もなくては退屈致す。

彦太。合圖なくとも押寄せて來るまいものでもムりませぬ。

昌恒。常陸（不安と狼狽とを此時のみは巧く包み隱し得ない。殆ど同時に云ふ）。何！　何と？

合圖なくとも攻め寄する？　どういふ譯で？

彦太。こちら樣の兵數が到底五百なんぞ無いと云ふ事は、もう瀧川樣達にも大かた分つてをりさうでムりまする。（少しく考へ）いやさり乍ら、合圖なしでは矢つ張り押し寄せますまいかな。何しろ上方勢が御當家を怖るゝ事は一通りではムりませず、用心の上にも用心を重ね重ね進んで來るのでムりまする。それ故やつぱり、大抵の見當ぐらゐはついたにしても、確かな合圖がない上は、押寄せかねるでムりませう。

昌恒（再び優越者らしい觀えを恢復し、わざと微笑など含みながら）。然らば矢張り我々に合圖の手數をかくるぢやな。

常陸（同）なあに、手數と云うても知れた事。

彌生（奥より登場）。あの、温井様、上様のお召しでムりまする。

常陸（昌恒に）。然らば拙者より此の始末お詫びしますぞ、助命の件も併せてな。（彦太が不安に堪へないらしい哀願の目で常陸を見てゐるので、叱る様な調子で）大丈夫、この常陸が引受けをるぞ。（又昌恒に）然らば尚ほもどしどしお調べ下されい。（と云つて奥に入る）。

昌恒（彌生の顔を見て、何となく親しげに）。どこをば跡部老人は歩いてをるやら、ちと御苦勞でもムつたな。

彌生（何となくツンとした心持で、顔を少し赤め）。なれども、仕方はムりませぬ。御老人のくせに、何事にも邪魔ばかりして、忠義振るお方でムりますもの。（奥に入る）。

昌恒（一寸寂しい顔になる。が、直ぐ氣を取直して彦太に）。その方には妻子はあるか。

彦太（感慨深げに）。あゝ、そ……それが有りますればこそ、此の命も惜しうムりまする。殊に母親のこと、子供のこと、どうして忘れられませうぞ。

昌恒。それ程までに大切な命であるといふ事も、忍びの役を授かる時は、けろりと忘れをつたぢやな。

彦太。さあ、それが……今になつて思つて見まするとと、悪い夢でも見た様な氣でムりまする。

昌恒。む、まあよい。――して、織田勢の事に就き、まだまだ幾らも聞かねばならぬ事がある。河尻肥前と瀧川左近の仲はどうぢや。どちらが信長信忠等の覺えは好いか。士卒の間の評判はどうぢや。先陣を爭ふ様な事はないか。今夜の夜討は誰の發議ぢや。違つた見込みや考へを申立てたる者はないか。……

（此時、蓑笠に身を包んで百姓風を裝うた者ども三々五々、すべて十名ばかり、表の方を通りかゝり、おづおづと内の様子をうかがふ。そして家の前を通り過ぎたと思ふと急に足を早め、始ど走る様に急ぎ行く。日はすつかれ暮れてしまふ。）

（昌恒が彦太に種々と訊ねてゐる間に、舞臺また靜かに廻る。）

三

（勝頼等の室。燭火が二つ、程よい所に立ててある。勝頼、鈞閑、麟岳、常陸。）

勝頼（少し不興げに、併し餘儀なく少し笑ひを含み）。然らば致し方がない。其方の口達者にはもう參つた。それ程までに云ふならば、今度は特別に其者の一命助けて遣はさうわい。常陸。有難う存じ上げまする。然らば近々北條家へお便りがムりまする節、かの男をも相添へて遣はす事でムりませう。

麟岳（不安さうに）。それにしても。今夜夜討を企らんでをつたなぞとは、敵もなかなか油斷は致されませぬよなあ。

釣閑（同じく）。して又、小山田出羽守が、敵に內通したなんぞと、云ふ迄もなく噂だけではムらうが、隨分いやな妙な噂ではムらぬか。

勝頼（自分の不安を强ひて追ひ拂ふ樣に）。何ぢや、臆病神に憑かれてよいか、追つぱらへ、追つぱらへ、臆病神は追つぱらへ。大かたそれは敵軍に油斷をさせて置く爲めの、出羽の計略の一つであらう。さりながら、郡內都留の樣子を見に行つたといふ使の者も、まだ歸らぬか。出羽よりの迎への使は未だにもしろ、その使はもう歸りさうなものではないか。

常陸。待てば何でも來ぬが此世の兎角のならひ、一つ我等も待たずにをらうではムりませぬか、さすれば却つて直ぐにも參らうも知れませぬでな。

釣閑。おげん殿にも嘸ぞ心配でござらうに。

勝頼。それに又あの秋山攝津は、黑駒在の舊被官を一寸訪ねると申して暇を取つて行きをつたが、何と致した事であらう？　病つたではあるまいかな？　我等の出立致す以前に戻つて來ぬと、織田勢に追ひかけられうも知れぬがな？

釣閑。屹度、あの、何でムりませう、あの男の事でムるによつて、序でに敵の動靜の一部なりとも探つて參るでムりませう。屹度何かさやうな事に相違はムりますまいて。全く以てあの攝津は感心な武士でムりまする。さりながら、又、もしや却つて敵に感づかれ、ひどい目にでも遭はねばよろしうムりまするが。

勝頼（滿足さうに）。又釣閑の攝津褒めが始つた、ハハハ。（短い間。少し調子を變へ）したがな、昌恒を呼べ、昌恒を。曲者は一室に閉ぢ込めて置くがよい。此身は何やら何となう、あの昌恒とたゞ少し話してみ度い樣な氣が致す。

麟岳（常陸が呼びに行かうとするのに代る）。いや土屋殿には、拙僧が御意を傳へるでムりませ

うぞ。して拙僧は若君のお目にかゝりに退出致す。多分拙僧の所にでも若君はお見えになつてをられませうな。(禮をして退出)。

勝頼　(釣閑に)。そなたは大炊を呼んで呉れい。

釣閑。は。(と辭儀して退場)。

勝頼　(常陸に)。古府に信忠が本陣を据ゑたとすれば、彼地に殘し置きたる味方の二人の間者よりも、もはや何とか注進が來さうなものと思ふが、どうぢや。

常陸。參らぬ所を以て見れば、兎にも角にも今日の夜討が無い事だけは、確かなものでムりまするて。

勝頼　(不安)。敵に降參致した事ではあるまいか? 其一人は大炊の手の者であつたであらうな。

常陸。他の一人は拙者の部下でムりますれば、大の字を二つ三つは重ねて附けてよい位の大々々丈夫でムりまするぢや。

足輕一名　(左の庭口より急ぎ登場)。温井様、どうぞ第二の宿舍までお出で下され、又いつの間にか三名だけ逃げ失せ申した。(と云つて直ぐ又急ぎ退場)。

常陸。何、又逃げた? 腰拔め! (勝頼に一寸禮をして急ぎ退場)。

(舞臺少しの間しんとなる。夜の闇次第に濃くなり、外の本蔭などには何か黑いものが蹲まつてゐさうに思はれたりする。)

勝頼　(腕を拱いてぢつと何やら考へる。かと思へば又急に不安に驅られるらしく、邊りをきよろきよろ見廻しなどする。それから立上り、何となく氣落ちした樣な低い聲で呟く)。昌恒はまだか、何處へ何しに行つたであらう。

(何處かで馬の嘶く聲が二聲三聲、妙に顏へつゝ斷續して聞える。)

勝頼　(はつと愕き、つかつかと椽側に出て、左の方の或る樹の蔭を見るや否や、悸然として思はず二三歩退る。顏は眞ッ蒼になる。氣を取直して又椽側に出で、刀の柄に手をかけて一寸身構へするが、それも又直ぐやめて、たゞ一心に其樹の蔭を睨み詰める。それから其の恐怖の緊張は次第に薄らぐ。深い溜息をつき)はあ、消え失せをつた! ても不思議な事ではある! (侍詰所へ通ずる唐紙の傍へ行き、少しあけて呼ぶ)昌恒、昌恒……誰か來い、大炊はまだか、釣閑は何とした、どこへ行つた、昌恒、昌恒。

（何の返辭も無い。燈心がぢりぢりと燃えて音するのが聞える。それ位に一體がしんとしてゐる。）

おげん（奥の唐紙をあけて靜かに入り來る。その顏が又妙に蒼白く。一段と痩せて見える。少し嗄れた無氣味な聲で）。御用でムりまするか。

勝頼（又ぎよツとする。が、强ひて平靜を裝ひ、少し顏をそむけながら）。いや、奥の者への用ではないぞ。其方は彼方へ行つてくれ。

おげん。それでは御免下されませ。（と云つて勝頼の顏を一二度見返りながら奥へ入る）。

勝頼（ホツとして）。おゝ、あのおげんの樣子までが、あれでは宛で妖怪ぢや。しかのみならず、何といふ厭な聲ではあつたらう！

（昌恒、急ぎ入り來る。）

昌恒。お召しでムりましたか……。や、何をなされましたぞ、そのお顏色？

勝頼（懷かしげに）。昌恒か。む、此身か、此身はな、いや此身は何とも致さぬぞ。皆は何とした？　詰所には誰一人もをらぬなぞとは……？　あゝ（と溜息をつく）。

昌恒。は、溫井も安部も安西も、それぞれ宿舍を見廻る爲め、又跡部は馬糧を檢めに參つた筈にムりまする。拙者は一すつい其處まで……。

勝頼。何やら怪しい事ではないか、皆が皆、さながら申合せた樣に、斯うも詰所をあけるといふのは……？

昌恒（云ひにくさうに）。實はその……逃げうせまする者どもを、一層嚴しく取締りまする爲め……。

勝頼。うむ、さやうか。うむ、さやうか。（間）。時にな、昌恒、不思議な事もあればあるもの、つい今さき此身が此處に唯一人、何となく思に耽つてをるとぢや、いや、何となくたゞそなたと話をしたいと思つてをるとぢや、あの丁度四年前、古府の書院の庭にて見たと寸分違はぬ馬の生首が二つ、（樹蔭を指し）あの樹の下に、嚙み合ひながら轉がつてをるではないか。して又やはりあの時の樣に、前以て二聲三聲嘶いたのぢや。今度は此身も、如何に變じて成り行くか、見きはめてやらうと思ひ、たゞぢつと目を据ゑて見詰めてやつたのぢや。すると、又程なくすうつと消えてしまつたのぢや。（短い間）どうせ狐狸の爲業か何かであらうが、あ

の四年前の事を、斯うも寸分違へず繰返すといふのは、何と不思議なものではないか。

昌恒（少し考へてから、稍や小聲で）。兎も角も、他人には餘りお洩らしなさらぬ方がよろしうムりませう。四年前にも、あれを御當家滅亡の兆ぢやなぞと、噂し合つた者も隨分ムりましたし……。（短い間。氣を取直し、強ひて放膽に）、いや、妖怪にもせよ狐狸にもせよ、所詮御退屈のお慰み、と思ふが惡うムりませうか。

勝頼（次第に元氣づき）。それはさうぢやな。（間）。して、今日は總勢いか程であつたな？

昌恒（云ひにくさうに）。は、その……七十三名でムりまする。

勝頼（自分の耳を疑ふかの樣に）なに、七十三名？（急に泣き出し度い位になつた自分の心を無理にも引締め引締め）。むう、昨日は百三十名と申しをつたな。新府韮崎を引上ぐる時は、七百以上もあつた兵が、十日も經たずに、軍さもせずに、何ぢや七十三名か、むう、如何にも。

昌恒（傷々しげに勝頼の顏を見守り、默）。

勝頼（努めて強がりを云ふ）。なあに、噂に怖ぢて逃ぐる奴ばら、何の軍さの役に立たうぞ。その樣な蟲けらどもは、逃がせ、逃がせ、蹈みにじつてやる迄もないわい。（間）。さり乍ら、郡內の樣子を見に行つた足輕も、まだ戻つては參らぬか。

昌恒。もうはや戻る時分でムりまするが……。もし又郡內岩殿よりお迎へが參りませんだら、明日は此方から押しかけて行つては如何でムりませうな？

勝頼（決しかねる）。む、それもさうぢやな。

石見儀助（腰をぺこぺこ曲げつゝ庭の方より登場。一通の書面を昌恒に渡す）。御免下せえ、へえ、これ秋山攝津樣の足輕衆が、上樣に差上げて呉れツちふて、置いて行つてしまはれやしただ、へえ。どうぞ土屋樣からお上げなすつて下せえやし。

昌恒（書狀を受取り、勝頼に渡す）。

儀助（又ぺこぺこしながら庭口より退場）。

勝頼。何？　攝津より此身に書狀：　扨ては愈よ病ひでもしたと見えるぞ。（しかし不審さうに封を切つて讀む）

信勝（左側の椽より戻つて入來る。）

勝頼（讀み行きつゝも、最初は容易に信じかね、幾度も其の眞僞を確かめる爲めの仕草をするが、その怪訝の表情は、次第に憤怒の色に變じ行く）。何ぢやと？「小生の先祖は元來甲州の者にも無之候故……」何？「小生も上様に諫言申上げたる事數々有之候と雖、少しも御採用無之によつて、ついに斯かる非運と相成り……」何？　何？　攝津が此身に諫言致した？「斯様の次第故、主從の緣も昨日までと御諦め下され度く、今日よりは全くの他人に候へば……」何？　何？　何？　これが攝津の書面ぢやと？　むう、確かに彼奴が直かに書いた文字ぢや。此身に向つて攝津よりの去り狀？　臣下より君主への去り狀？……うぬ、攝津め、（と云ひさま、書狀を下に投げつけ、更に拾ひ取つて寸裂しようとする。が、又急に何事かに氣付き、辛うじて自分を制し、それを懷に納める。そして如何にも人を信じ得ないらしい目つきで、昌恒や信勝を妙にじろじろと見る。それから暫く茫然として默つてゐる。間。）

（安部貞村、安西平左衞門の兩人、右側の唐紙をあけて登場。）

貞村。申上げまする。山縣源四郎、馬場民部、屋代越中の三名、騎馬武者百餘名、雜兵七百を引連れ、御供として馳せ參じましてムる。

勝頼（疑深げな不安な目つきで二人を暫く見くらべてから）。何ぢやと？　誰が何しに參つたのぢやと？

平左衞門。屋代越中守、山縣源四郎、馬場昌房の三名、部下を率ゐて參じ申した、總勢八百餘名でムりまする。

勝頼（怖れる）。何、八百餘名で？　皆甲冑を着けてであらうな？　以ての外ぢや。さやうなものを供に加へて堪るものか。早く引退る様に相傳へい、早く傳へい。

平左衞門（情けなげに）。そりや上様、あゝ、又お疑ひでムりまするか。

勝頼。云ふ迄もないわい。昨日も高坂源五郎が、敵にでも向ふが如き扮裝（いでたち）にて、三百餘名の兵を引連れ參つたが、今日は又馬場山縣が、何ぢや總勢八百で來た？　誓紙でも書くならば書け、起誓でも致し度ければ致すがよいわい、此身の供には加へはせぬぞ。

昌恒（半ば獨語）。よしあやふやの心をば、幾らか持つて參つたものとしましても……

貞村（勝頼に）。上様さへ尙も大きい美しいお心をお見せに相成るならば、さやうな小さいあや

ふやなぞは、見る間に消えてしまひませうぞ、して尙ほ一層御奉公を勵むに相違ムりませぬわい。

勝頼。えらく諫言めいた口を利くではないか。此身は餘りに正直でな、今までは人を信じてばかりをつたのぢやが、さうさう甘くは乘りはせぬぞ。ヘン、先祖以來の君臣の關係なんぞ、まことに深く思へる者か、抑も幾人どこにをるのぢや。淺間しいとも何とも云はう樣はないわい。

平左衛門。恐れながら申しまする。御先祖八幡太郎義家公に、絶へず害意を抱きをつたる宗任でさへ、たうとう眞心を傾けて御奉公申上ぐる樣相成りましたは、一體なぜでムりまするぞ。宗任如き者をさへ、義家公は、近侍の士としてお使ひになり、夜の忍びのお出ましにまで、たゞ宗任一人をお連れに相成り、御自分は車中に睡つてお居でになるといふ樣な、その樣な御信任のなされ方であつたればこそ、ではムらぬか。どうぞ上樣、彼等のお供、叶へてやつて下されませ。

昌恒。殊に斯樣に味方の人數不足の際、どれ程助かるか知れ申さぬ。士氣も振つて、もはや逃げ出す兵なども屹度なくなるでムりませうに。

勝頼。うるさい、八ケ間しいわい。許さぬと云つたら許しはせぬぞ。御先祖の事なぞ其方どもから引合に出して貰はずとも、疾つくにちやんと知つてをる。八幡公のあの場合と今の此身の場合とを同一にして論ぜらるゝか。山縣にせよ、馬場にせよ、まことの忠義ある武士ならば、受持ちの固めの城をおめおめ敵に明渡しおき、此の勝頼によくもよくも合はせる顏があるではないか。詰り彼等の卑怯の果てが、此の敗軍と相成つたるぞ、二百でも、八百でも、戰ふに足るべき兵があるならば、なぜ敵軍中に斬り込まなんだ、申譯が立つだけの事をばなぜに致さなんだ。

（釣閑と大炊、右の方より登場。）

そりや釣閑が來た、大炊が來た、どうぢや釣閑、馬場山縣が供に加へて貰ひ度いとて、戰爭仕度で參つたさうぢや、屋代もやつて來たさうぢや。其方達は何と思ふ？　なあ、大炊、如何に此の勝頼とても、さうさう迂濶に乘るものか。

大炊。あの……矢張り何でムります、お供お許し下さる方が、宜しからうと存じまする。今八

百の兵があれば、どれ程心強いか知れませぬ。

釣閑。どうぞ上様、こればつかりは、山縣以下の者どもの願の通り、お供にお加へ下さいませ、代々世々の君恩を決して忘れ居る彼等とは思はれませぬ。どうぞ、どうぞ上様……。

勝頼（云はせも果てず懷中より、秋山攝津の去り狀を掴み出し、釣閑の面上に叩きつけ）。たはけ者め！　貴様の眤懇な攝津はどうぢや？　これを讀め！　貴様はかねて此身に向ひ、彼奴の事をば、抑も何と云ひをつたるぞ。

釣閑（非常に恐れ入り、おどおどしながら書狀を默讀する）。

大炊（屹とした樣子で右書面をのぞき込む。釣閑に同情する風は少しも見せない）。

信勝（半ば獨語）。御兄弟の木曾や穴山が敵に內通し、緣續きの小笠原や下條が軍さもせずに敵に降り、義で鳴つた今福が君を騙し、情誼に厚いと云はれれ秋山攝津が節を賣るなぞと、これで人の和が何處にあらう。

勝頼（獸味式な云ひ方）。みんな此の勝頼の愚かな爲めさ、ヘン、云はずとも分つてをるぢや。

釣閑（讀み了つた去り狀を取り落しなどして、慷慨悲憤の態）。扨ても扨ても、斯樣な攝津であつたるか。あゝ、これでは人面獸心と云はうか、何と云はうか、いやはや實に言語道斷。……

（勝頼の前に頭を疊に摺りつける樣にしてあやまる）この釣閑、全く面目次第もムりませぬ。何となりとも上様のお胸の透きまする樣、存分の御處置をお加へ下さいませ。（しかし又攝津を憎む自分の心を抑制しかねをる風を見せ）それにしても憎い攝津め、憎い憎い攝津め！

大炊（同じく慷慨悲憤の態）。むう、これが人間として爲さるゝ事か。人の皮着た鬼畜の秋山！

よくもよくも此樣な去り狀なんぞを我君に……。

平左衛門。では上様は、何としても彼等の願を……？

勝頼（聞きも終らず）。くどいわい、八ケ間しいわい。云ひつけた通りに早速と致せ、さつさと去せいと彼等に傳へい。

大炊。致し方ムりませぬ。詰りは山縣以下の者どもの怠慢が元でムりまする。上様の御立腹も御尤も至極。然らば拙者、さやうに傳へに參るでムらう。（とすたすたと退場）。

平左衛門（深い溜息を洩らしつゝ退場）。

貞村、昌恒（期せずして顏見せ、共に深い溜息をつく）。

釣閑（尙ほ秋山攝津を憎む心の烈しい餘り、餘事には氣を向けかねてゐるかの風）。

（稍や長い間。）

昌恒（耳を欹て）や、詰所の方で……。どうやら使の足輕が戻つた樣な氣はひが致す……。（と半ば獨語ちて、立つて行かうとする）

勝賴。此處へ通せ。此身も直かに樣子が聞き度い。

昌恒（急ぎ退場。間。それから又入つて來て）お庭さきへ廻らせました、今直ぐそこへ。

（一同非常に緊張した期待の態。）

使の足輕（稍や喘ぎつゝ庭口より入り來る。頰には少し血が流れ、着物は搔裂かれたり、汚れたりしてゐる。大地に手をつき）只今戻りました。遲く相成り誠に面目ムりませぬが、これには仔細がムります。先づ途中の事より申しますれば、笹子峠より此方一里が程、逆茂木を植ゑ柵を結び、何でも嚴しい防備の手配が出來致してをりまする。

釣閑。何ぢやな？　嚴しい防備の手配？

勝賴（自分の不安を强ひて打消し）。云ふ迄もなく、織田勢を防ぐ爲めぢやな。して、都留城下の樣子はどうぢや？　なに故なれば迎への使者を、今に及ぶも遣はしをらぬぞ？

足輕。峠に構へてをりまする仰山な關所に於て拙者を捕まへ、これは織田方の間者に相違なしと申して、拙者のあらゆる申開きも耳の端にも入れませず、却つて拙者を無理無態にも拷問するのでムります。やれ織田方の總軍勢はいか程ぢやだの、やれ信忠の旗元にも鐵砲隊がをるかだの、さやうの事のみ相尋ねるのでムります。そして拙者を、知らざる振りを張り通すかと罵り立てて、蹴つたり蹈んだり、……あゝ實に、實に、拙者は殘念でなりませぬわい。

昌恒。足早を選んで其方が遣つたが、さうぢや、さうぢや、其方はまだ新參で、郡內の兵士等とは顏見知りもなかつたぢやな。殊に色が白い爲あ、上方兵と見られたな。こりやどうも其方には氣の毒であつたぞ。

釣閑（特に勝賴の注意を惹く樣に、昌恒に）。それゆゑ拙者が申せし通り、あの今一人の足輕をお遣りなさればよかつたのぢや。

勝賴（昌恒を少しく叱る）。かほど大切の使者を出すに、さやうに手抜かりをして何とする。ち

えッ！（氣を取直し）さり乍ら又上方勢を出羽が警戒致しをる嚴しさの程、その一事でも思ひやらるゝ（と誰にともなく贊成を求むる氣持）。

鈞閑。はい、はい、それはもう、あの用意周到な出羽の事でムりまする、何から何まで遺漏は恐らくムりますまい。

貞村（足輕に）。その方を織田の忍びの者と咎めたは、關所の者どもすべてであるか。

足輕。十四五名の足輕どもが、口を揃へてさやう罵り呼はり申した。その餘の軍兵どもには拙者、たうとう顏を合はする事もありませなんだ。足輕大將になりとも會つて、是非々々仔細を云ひ度いと存じましたが、それをも許して呉れませず、それより拙者を牢屋の樣なる暗い所へ、押込めやれと申してからに、無理矢理に引立て行くのでムりまする。その時拙者は一寸の際をうかがつて、一生懸命、やつとの事に逃げ戻つて參りましたぢや。

貞村（考へる）。むう。

勝賴（足輕に）。よろしい、一先づ引さがりをれ。

貞村（足輕に）。いや兎も角も大きに御苦勞。然らば後にて拙者も又、少々尋ね度い事あれど、先づ引退り休んで呉れ。

足輕。畏り申した。（禮をして退場）。

大炊（足輕と殆ど入違へに、右側の唐紙をあけて登場。入口の所に手をつき、平柄顏に）。上樣、小山田八左衞門が參じ申した。たゞ一人、丸腰の儘にて、詰所に控へ、御沙汰を待つてをりまする、はい。

勝賴（短い間。見る間に嬉しさうな顏つきに變り）。こゝへ通せ、早く、こゝへ。

大炊（引き返す）。

（一同やゝ緊張。間。）

大炊（八左衞門を連れて入り來る）。

小山田八左衞門（末座につき、稍や口早に）。お供に馳せ參じまして厶りまする。なにとぞ御旗元にお組み入れ下されます樣、たつてお願ひ致しまする。實は叔父出羽守と共々に、新府城にて上樣とお別れ申しましてより、拙者だけは石和（いさわ）にて又叔父と別れ、八幡の方へ兵を募り

に參り申した。ところが時日切迫、埒あかず、それに此方の上様の御身の上、氣にかゝつてなりませず、たうとう空しく八左たゞ一人、斯様に走り參つた次第にムりまする。此上はなにとぞ御旗元にお加へ下されまする様、是非々々お願ひでムりまする。叔父出羽守儀も、拙者が遲く相成れば上様のお供を致して郡内へ參るものと、かねて承知致しをるのでムります。

勝頼（笑をさへ湛へて悦ぶ）。素肌で丸腰で參らずとも、眞心ある武士を疑ふ勝頼ではなし。さりながら、其方としては誠に殊勝な心掛けぢや。其方の様な臣下を一人持つは、あやふやな七八百の兵を從へ居るより、どれほど頼もしいか知れはせぬ。旗元に入り働き呉れい。さりながら、武士の丸腰は些と恰好が好くないぞ、ハハ。（釣閑に）何か差し料を取らせい。それから此身の着替への具足一揃、これは當座の褒美であるぞ。

八左衛門（感泣の態）。はツ、限り無い君恩の程、八左死すとも忘れは致しませぬ。

（釣閑は立つて奥に入り、程なく鎧櫃一つに大小の刀を載せて捧げ持つて入り來り、八左の前に置く、八左なほ一層感泣の態。やがて八左は拜領の品を持つて詰所に入る。それから今度は脇差だけを差して又入り來る、

八左衛門（幾らか内々尋ねる様な口調で、主として大炊に）。拙者はもう、大かた上様ははや都留へお越しになつてをらうも知れずと、さう思ひながら參りましたぢや。それにしてもまだ都留よりのお迎へが參らずといふ譯にてもムりませうか？　さりながら、さやうな使が參らずとも、もうはやお越しになつてよいではムるまいか。彼地に於ては云ふ迄もなくお待受け致してをるでムりませうに。

（一同不安の氣持を去つて、晴れ晴れしい顔つきになる。貞村だけはまだ腑に落ちない所があるらしく、殊に八左に對し心を許せない様子。）

平左衛門（右側の唐紙をあけ、入口に中腰になつて、元氣よく。）お待ち兼ねの郡内よりのお迎への使者、竹田左衛門行村が參りました。

（一同愈よ明るい氣持になる。貞村だけはまだ安心しかねてゐる。）

八左衛門（獨語）。あゝ、拙者は丁度よい時に參つたわい。

竹田左衛門行村（平左衛門の目配せにより登場、勝頼の前に手をつき）。鼻出羽守信茂の使者と

して、お迎へに參上致しました。何卒明早朝より郡内都留の岩殿城へお越しの程、お願でムりまする。少々遲く相成りましたは、何しろ上方勢に對する防戰の準備に、最善を盡せし爲めにムりまする。もうはや百萬の敵を引き受けますとも、決して落城の虞れはムりませず。實は警護の軍兵をも引連れて參る筈にてムつたなれど、愈よ織田勢と刄を交ふる段となります迄は、なるだけ味方はひつそりとして、敵に油斷を致させ度との考から、此の行村たゞ一人、しかも斯樣に身を窶して、夜陰にそつと參つた次第にムりまする。

勝頼（威容を崩すまいと努めながら、嬉しい心を包みかねをる）。うむ、いや何もかも行屆いた出羽の方寸、今更ながら感じ入る。

大炊。御武運をお開きになりますこと、もう鏡にかけて見る樣でムりまする。

釣閑。蛟龍も池中に居る事ありとやら申す通り、今日までの上樣は、まあ其の池中に忍んでお居でなされた樣なものでムりまするて。

勝頼（につこと笑む）。岩殿城の天險と、出羽以下一同の忠節とにより、上方勢を鏖殺するも、もうはや三四日の中と相成つたな。何といふ愉快な事ぢや。然らば早速、今夜にも出發致さうかの。

行村、八左。（瞬間無意識に目と目を見合はせ、當惑と狼狽と不安の色を著しく浮べる）。

貞村（右兩人の樣子を拔目なく觀察し居る）。

八左衛門（少しく云ひ澁りながら、勝頼に）。さあ、さやうでムりまする……それは、その些とどうも……。

勝頼（打笑ひ）。ハハハ、誰が夜發たうぞ。あの勝頼はこそこそと夜逃げをしたなぞと云はれてよからうか。ハハハ、少々其方どもを試してみた迄ぢや。――さ、然らば皆ももう退つて寢るがよい。此兩三日、いろいろな心配やら考やらで、皆も嘸かし氣苦勞を致したであらう。此身も寢ようぞ。（と奥へ入る）。

信勝（同じく立つて奥へ入る。）

貞村（此時まで腕を拱いて何やら考へてゐたが、何氣なく行村に）。拙者は貴殿に少々お尋ね致し度い事がムるが、暫時別室に來て下さらぬか、何、ほんの一寸の事なんで……。

行村（瞬間少しく妙な疑惧の色を浮べるが、直ぐ又平氣を裝ひ）。何の御用か知りませぬが、お

安い事でムりまする。然らば參りませうわい。

（一同座を立つて引退る態にて、舞臺まはる。）

四

（二三分間、黑い幕が垂れてゐる。近從の詰所。昌恒と貞村、寢ず番をしてゐる）。

昌恒（時々不安さうに四邊の物音に耳を欹てなどしながら）。何やら拙者は妙に斯う氣がかりで氣がゝりで、仕方がムらぬ。どうも味方の旁は、一から十まで喰ひちがひ、ちぐはぐにばかり相成りをるではムるまいか。

貞村。貴殿もさやう思はれをるか。信ぜねばならぬ事をば皆疑ひ、用心せねばならぬ事をば直ぐ眞に受くる、といふのが上樣の殊に昨今の爲され方の樣思はれて、どうも安心がなりませぬて。とは云へ上樣のお考の問違つてをる證據の程が、我々に分明致してをるではなし、强つてお諫め申すわけにも行かず。

昌恒。詰りすべての事をば見拔き、味方一同を導き行く元締めとなる人物が無いからの事でムらうな。まるで舵無き船の樣に……いや上樣が其舵をお取りになつてはをるものゝ……。

貞村。その舵取たる上樣のお目をも、まつたお心をも、狂はす所の或る變な怪しいものがムるでな。

昌恒（はつと或る一種の恐怖の衝動を覺えるが、直ぐ又何氣ない風を裝ひ、稍や低い聲で）。たゞの狐や狸のわざだけならば、まだ何とか仕方もムらうが、……どうも、その、長坂殿やら跡部殿が……。

貞村。如何にも、如何にも。さり乍ら、他にもまだまだムらうぞ。あの小宮山內膳殿が、やはりあの時言上致されたる通り、目に見えぬ或る忌はしい根性が、まるで蠅の樣に、上樣の心に喰ひ入つてをりまするのぢや。天地の間の大いなる永劫の道理を貴ばず、つまらぬ事で威張つたり、偉がつたりする樣な、さやうな忌はしい根性がな。上樣が亂暴をなさるのも、詰りその根性の仕業でムるぢや。亂暴をなさるによつて部下は日に日に反いて行くし、日に日に部下も少くなる故上樣は、內心非常にびくびくなされて居るでムらう。して其のびくびくのお心にて物事を判斷なさるにより、何もかもちぐはぐにばかり相成り申すぢや。たゞ斯

うとばかりも云へぬか知れねど、まあ大體は此の通り。しみじみと拙者は昨今、あの内膳殿の事をば思ひ出しまするて。

昌恒。あゝ、あの小宮山殿がをられるならば、まさかこれ程の非運とも相成つてはをりますまいに。さり乍ら、あの様な小宮山殿でさへ、上様のその、蠕の様な忌はしい根性の爲めに斥けられてしまはれた上は、もう萬事が絶望でムらうかな？　もう我々は刻々と不安な思がたゞ募り來るばつかりで、何とも仕方はムるまいか？（半ば獨語）もう都留へ行くばかりとなつて居りながら、此の一夜の明くる事さへも、どうして斯ほどに氣になる事やら！

貞村（半ば獨語）。都留へも果して行かれますやら……。（耳を欹て）もう何處もすつかり靜まりましたな。何やら妙にしんとした夜ぢやなあ。又少し其邊を見廻り申さうか、又逃げ出す奴が無いとも限りませぬでな。（刀を携げ立上る）

昌恒（輕く聞咎めながら、同じく立上り）。都留へは素より明日お發ちではムらぬか、……今夜は拙者、下手を見廻り申さうて。

貞村（出て行く際に低い聲で）さいぜん參つた小山田八左に竹田行村、あの兩人は大分こうムりまするぞ。御用心が肝腎ぢや。

昌恒（訝る、又自らそれを取消す）。なに、あの兩人が……？　まさか。

（昌恒は左へ、貞村は右へ靜かに退場。鼾の聲が何處かで微かに聞える外は、しんとした靜かな夜。やゝ長い間。）

彌生（奥より登場。呟く）。まあ、夢か知ら、あれほどはつきり見えたのに……。

松の方（程なく彌生の後より續いて登場）。彌生かえ？　お前さやうな所に何をしてをります？

彌生。まあ、御免あそばせ。どうして松の方様はお目覺めになりました？　私あんまり不思議な夢を見ましたので、どうしてもぢつとして居られませず……。

松の方。どの様な夢？

彌生（少し伏目になつて默。）

松の方（同情を寄せる）。又あの小宮山の夢であらう。な、さうであらうが。

彌生（なほ少しぢつとして默つてゐた上で、靜かに顔を上げ）。三千餘りの兵を引連れまして、

此方へお供に參りました。そして、不思議な事には、上樣も少しもお疑ひなど遊ばさず、萬事よき樣に計らひ呉れと、それはそれは御立派な大將樣の御態度で、お頼みになつてをりました。そして、それが迚も夢とは思はれぬ位ゐ、はつきりとしてをりましたので……。あゝお羞かしうムります。御免遊ばせ。(袖で顏を少し蔽ふ)

松の方。それはお前、夢でなうてどうします。もうあの樣な武士が味方なんぞに來ますものか。御勘氣を受けて、流浪して、困り拔いてをるといふではないか。どの樣にか上樣を賤んでをりませう、憎しんでをりませう。我身はもう御家はこれで終りではないかと思ふ。(と松の方も少し顏をそむける)。

彌生（又夢のあとを追ふ樣な心持で）。それにしても、あの樣にはつきり……。

松の方（幾らか彌生の心持に引き込まれ、漫ろに何やら考へつゝ、半ば獨語）。ほんに、さう云へば……我身も何やら斯う不思議と思ふ事には、今お供となつて殘つて附き從うてをる者は、みんな以前に小宮山と仲の好かつた人達ぢやもの……。尤も跡部と長坂と、それに麟岳殿と此の三人は昔から小宮山とは敵の樣にしてをつたのなれど、何やら斯う近頃は、此の三人の影が薄い樣に我身には思はれる。まるで居らぬ樣な氣持さへする……。そして安部だの温井だの、安西だの土屋だのいふ人達の小宮山贔負は無論のこと、（次第に涙ぐみ）足輕雜兵の末に至るまで、殘つてをるのは皆あの小宮山に心から服してをつた者ばかり……。これも、あの樣な人の事ゆゑ、おのづと遺した其の餘德ではあらうなれど、それにしても、何やら斯う……。それに又、お前も其樣な夢を見た事ではあるし……。

彌生（半ば無意識に）。なれども私は、よし小宮山が萬一歸ると致しましても……。

松の方（怪訝と憐憫の表情で、彌生の顏をぢつと見詰める）。

彌生。あの、松の方樣、女といふ者は、いへ、女に限りますまいけれど、取りわけ女は、相手の男の愛を確めるまでと、男に捨てられた後との外には、どうして眞面目な立派な心が持てない勝ちでムりませう？　殊に私は……あゝ、もう永劫あの人の傍へは寄れないのでムりまする。(啜り泣く)。

松の方（痛はしげに彌生を見て、言葉でよりも態度や心持で、より多く慰める）。それ程に思はぬがよい。今のお前の美しい心は、もう永劫あの小宮山の傍に居る樣に、許されてをるも同樣。

彌生（氣を取直して涙を拭き、靜かに土間に下り、表の戸口を細目にあけ、少しの間默つて外を見廻はしをる）。

（程遠からぬ所で、馬の嘶く聲が二三度聞える）。

松の方。さあ、戻つて寢むとしよう。此の樣に壯嚴なしんとした夜の靜けさを破るのは、何やら惡い事の樣な氣持がする。

彌生（闇の裡に何かを見とめ、それを屹度目を据えて確かめる態。つと其處を離れ口早な抑へつけた樣な聲で松の方に）。誰か逃げまする。（右の方へ向つて稍や高く口早に叫ぶ）、宿直のお侍樣、お侍樣、土屋樣、安部樣、どなたかお出なされませ。

（右より昌恒、左より勝頼、殆ど同時に登場。勝頼は夜着の儘である。）

昌恒。何？　何と云はる？　誰が逃げたとな？

彌生。長坂樣に跡部樣がお逃げの樣でムりまする。屹度あのお二人でムりました。彼處の厩より馬を二頭引き出してお乘りになる所を、私確かにそれと見ました。

勝頼（憤怒）。早速追ひかけて射殺せ。餘人は兎も角、あの今まで拙者に諂らひ居つた人非人ども。さ、早く。（立てかけてあつた弓矢を急ぎ取り、昌恒に渡す）。

昌恒。ちえッ！　果して彼奴等、逃げ出しをつたか！（と飛鳥の樣に追ひかけ行く）。

勝頼（獨語）。おべつか者の大炊に釣閑、どうせ忠義の心なんぞを、奴等に望んではをらなんだれど、さうと承知で使うてをつたは、どうせ腰拔、滅多に危險を冒してまでも逃げは得まいと多寡を括つて、半ばは軍旅の慰みものと思ひ貶してをつたればこそぢや。然るによくも夜に紛れて……。（二人に向ひ）それにしても、そなた達は、彼奴等の逃ぐるに好う氣づいたな？

彌生。私が夢にうなされてをります所を、松の方樣が起して下されました時、變な物音が厩の方でしましたので、何とやら胸騷ぎが致しまして、急いで參つてみますると、只今の次第でムりまする。

松の方。あの二人が四年前にをりませなんだなら、斯樣な破目にもなりますまいに、いやな軍陣のお慰みでムりましたこと。

勝頼（少し悸然とする。）何、四年前ぢやと？（又直ぐ氣を取り直す）いや、なに、何でもない

わい。

平左衛門（右より急ぎ登場。怪訝の面もちで口早に）。これは上様、どういふ譯で今頃此處に……？　して又、そのお顔色は？

勝頼（稍やどぎまぎと、口早に）。其方もあと追つかけて射殺せ……射殺して呉れ、跡部長坂が今逃げたのぢや。昌恒は飛んで行つた。さ、其方も弓がよい。（弓矢を取つて渡す）。

平左衛門（引つたくる様に受取りさま）。然らば上様。（と一散に追ひかけて行く）。

勝頼（女二人に）。そなた達のお蔭ぢや。もし逃げ延ぶれば此方の事情を、一層細かに敵方に傳へる奴等ぢや。どうであらうな、昌恒は射とめたらうか？　安西は些と遅かつたが、どれ位ね逃げてねさうな頃なのぢや？

彌生。今さき馬が二聲三聲嘶きましたのが、あの二人の引き出す所でムりましたゆゑ……。

勝頼（愈よ悸然とする）。何、馬が嘶いた？　扨ては、そなたの耳にも入つたのぢやな！　む、此身も聞いたぞ。その後か。む、よし、分つた。

松の方。上様も、好う直ぐお目ざめでムりましたこと。

勝頼。何やら心氣が昂じて碌に睡られず、うとうと致しをる所に、それ、その、さつきの馬のあの嘶きぢや。……（一寸云ひ淀むが、思ひ直して云つてしまふ）あゝ、あの聲で、何やら胸騒ぎが致して堪らず、跳ね起きたのぢや。そして庭の樹蔭をふと見やつたのぢや。するとな、それ、あの四年前に古府の書院の庭に出た馬の生首が二つ、矢張り嚼み合ひながら轉がつてをるではないか。日暮れ方にも、此身一人の時に見えたがな、又見えたのぢや。そして其の二つの首が、今度は變に斯うどうやら人の顔の様になり、あの越後の喜平次景勝に、一今一つは（と松の方を見）、そなたの兄三郎景虎殿の様になるではないか。

松の方（愕きと怖れの輕い痙攣）。まあ！

彌生（勝頼の話るのを咎める様な、松の方を守護する様な表情でゐる）。

勝頼。なほ見てをるに、喜平次の顔をした首は案の定、三郎殿の方を嚙み殺し、それから首ばかりでなく胴も足も次第に生へ、鞍をも置かず誰やらを乘せ、ずつと彼方へ行つてしまうたが、その乘手が一寸振り返つた顔は、どうであらう、あの腰元頭のおげんではないか……。そしてすつかり消え失せてしまうたのぢや。と思ふと其時彌生の消魂しい聲がしたにより、

早速參つてみた次第。（强いて自分に元氣をつけ）なあに、狐や狸の惡戯であらうて。して其お蔭に釣閑どもの逃亡を早く氣付いてよかつた譯ぢや。

（と云つて勝賴は戸口より外に少し出て、昌恒等の戻り來るのを待つ心持。）

（と、また逃走兵らしい者二三人、木蔭の邊りに見え隱れして、此方の戸口より射す光を憚りながら、忍びつゝ急ぎ走り行く樣子。勝賴も直ぐそれに氣付き、新たな憤怒と共に、一寸追つかけようとするが、又自分を制する樣な諦める樣な態度。雲破れ、月出づ。）

勝賴（漫ろに感慨を覺え、少し投げやりな調子で獨白）。毎日々々、逃げる奴どもばかりぢやなあ。此身の德望無きが原因かも知れぬわい。あゝ、何やら斯う此の勝賴の命數も見えて來た樣ぢや。（氣を取り直し）何ぢや、ハハハハ、明日郡内へ行きさへすれば、萬事安心ではないか。（間。眺めるともなく四方の山の姿など眺めるに連れ、又妙な不安に襲はれる）夜中に見るせゐか、どの山も、どの山も、皆まつ黑に肩をならべて、ぬつと無氣味に押し默りをる。おゝ、まるで此身に今にも押しかぶさつて來さうな姿ぢやないか。先き程は賴もしい險山と見えたのが、今では何うやら此身をば鵜呑みにもしさうなあの樣子。

彌生（戸口に來て）。唯お一人で上樣は、何を申されてをりまするやら。内へお入りになるが宜しうムりまするに……。

勝賴（入口の方へ歩いて來ながら、やはり半ば獨語）。いや、何でもないわい。たゞな、目に見えぬ妖魔といふものは、押しのけても押しのけても、何處からともなく、いつの間にか入り込んで來て、人の心を威かすのぢや。あゝ……。

彌生（勝賴の顏の蒼白さに愕くが、さりげなく靜かに又松の方の傍へ行く）。

昌恒（走つて戻り來る。片手に弓矢、片手に跡邵の首を携げ、息遣ひ荒く）。釣閑めをば取逃がし、何とも申譯ムりませぬ。奴等が徒歩であつたなら、二人とも決して逃がしは致しませぬが、馬に鞭當て一目散に落ち去り申した。幸ひ提燈を鹽手に引付け落ちて行くのが見えましたにより、月は曇つてをりましたれど、その火を目當てに、唯の一箇で射落し申した。それが此の大炊めでムりまする。安西も程なく拙者に追ひつきましたれど、はや釣閑め、姿も見えず相成り申した。さり乍ら又其時別な一人の逃亡兵が折から走つて來たのを安西、頭より胴へまツ二つに致しましたぢや。や、今戻つて戻りまする。

平左衞門（走り戻り來る）。何とも申譯ムりませぬ、大事の鈎閑を取逃がし、ちえッ、無念至極。

勝頼。其方は遲かつたゆゑ是非もない。したが又別な一人を斬り殺し呉れたと聞くぞ、それで滿足。

（勝頼以下三名とも内に入る。信勝も奥より登場。）

昌恒（大炊の死顔を燈火の光で見つめ、憤激して涙ぐみ）。上様、拙者は此の……此の白髮頭を見ますれば、思へば思ふ程、……何事も此奴と鈎閑めの爲めに……。そして、たうとう斯ういふ破目になりまして……。

彌生（昌恒を、さも賤しむらしく見てをる）。

勝頼。（少しどぎまぎと）。うむ、さう……さうぢや、全く以て。此の（と首を取り上げ、土間に投げつける）人非人め！

松の方
彌生　（共に顔をそむける）。

松の方（淺間しげに獨語）。まあ、どの様な人にもせよ、死ねば佛と云ふてあるに。

信勝（半ば獨語）。拙者は生きた鈎閑を見蹴に致さうとして叱られたれど、今は大炊の死首なんぞを投げつけて、それが何になるのであらう。

（貞村と常陸、右の方より急ぎ登場。）

常陸（勝頼を屹と見て鋭く）。上様、出羽は背きましたぞ！

貞村（同）。小山田信茂、愈よ敵に内通しましたッ！

勝頼（自分の耳を疑ひ）。何？な、なんぢやと？

昌恒、平左衞門（殆ど同時に）。何？何と？誰が何をしましたと？

貞村（一息に云はうとする）。古府にとどめて置きましたる味方の二人のあの間者、信忠勢の動靜を言上の爲め、早馬にて石和を過ぎ、つい二た時餘り前、勝沼近くまで參つた時、蓑笠出立の出羽方の武者十幾名、これ亦大急ぎに古府をば差して行くに出で會ひ、扨ては味方と、挨拶もし、用向其他を相尋ねんとしました所、物をも云はずに向うの奴等は、二人に斬つてかゝりまして……

生（急ぎ奥へ入る）。

常陸（貞村のあとを續ける）。一人は全くしてやられ、一人は斬られて打倒れ、路傍の崖より滑り落ちて、一寸氣が遠くなりましたのを、死んだと彼方の奴等は心得、これで挾み討ちの策略は上首尾々々と、悦び合つて又直ぐ西へ、笑ひながら馬を飛ばしたと申しまする。その間者が、と云ふが卽ち拙者の組下の足輕でムりまするがな、程なく正氣に復するや否や、近所の百姓馬を盜み出し、つい其處まで參りましての口上が右の通りで、それから間者は其處の橋をば渡りも果てず、がつくり氣力が拔けてしまひ、たうとう往生致しましたぢや。これにて直かに申上げさせられなんだのは、何たる無念。あゝ足輕とは云ひ乍ら、惜い武士でムりましたに――。こりや上樣、一刻も御油斷は相成りませぬぞ。奥の詰所をお調べ下され、出羽の母親は寢てをりまするか、おげん殿は居りまするか。（昌恒と平左衞門に）行村は居りまするか？八左は居りまするか？

昌恒、平左衞門（右の方へ飛んで行く）。

（麟岳、他の腰元二名、雜兵七八名、方々より急ぎ登場。皆極度に緊張の態。）

勝賴（まだ幾らか信じかねる樣子）。何ぢやと？　信茂が、あの出羽が叛いたとな？

彌生（急ぎ奥より入り來る）。おげん殿は居られませぬ、寢床は藻拔けの殼でムりまする。枕もとの屏風も倒れ、草鞋の痕が皆で九つ、椽から疊へかけて印いてをりまする。

（昌恒と平左衞門、飛んで戻り來る。）

昌恒（口疾に）。相違ムらぬ。先程參つた小山田八左と竹田行村の二人の者、出羽の母おげんを盜み出し、もう疾つくに逃げうせ居りまする。

平左衞門（同）。廚までかく振りをしをつた八左の寢床に、温みの氣さへ無いのを見れば、あれから直ぐ仕事をしたに相違ムらぬ。拜領のお鎧は、櫃諸共に蹴轉ばかしてムりまするぞ。

彌生。おげん樣の寢間の草鞋の痕も、庭さきの泥濘を蹈んでをりながら、すつかり乾いて印いてをりまする。

信勝。何？　信茂が叛いた？

麟岳（怖ぢをののく）。あの……あの出羽守が內通とな？……あの小……小……小山田が裏切つたとな？

勝賴（顏色次第に蒼ざめ、目は異樣に光る）。さやうぢやといふ事でムる。あの信茂が、あの男

が、此身を騙したといふ事ぢや。(凄く笑ふ)、ハハハハハ。其様な事があつてよいか、ハハハ。織田に降參して、内通して、此身を挾み討ちぢやとな？……仁義忠孝を人にも說き、其身も行ひをつた筈の、あの小山田信茂がな……。(間。又一層凄く笑ふ)ハハハハ……。

一同(心配と同情に滿ちた目つきで、一心に勝頼を見詰め居る)。

勝頼(殆ど死人の様な顏になり)。其方どもが一心に此の勝頼を見詰めてをるは、信茂の叛逆が些か相違ない爲めぢやな。此身が誰にも誰にも逃げられて、此世に又とない不仕合せ者である爲めぢやな。さうぢや、むう、さうぢや、又ない不仕合せの此の勝頼ぢや。

昌恒、常陸(顏をそむけ、悲憤と同情の涙をのむ)。

勝頼。あの八左と、あの行村とは、此の勝頼を、うまうまと騙してのけたな。(勝頼の顏は殆ど蒼白の極に達し、目は氷の様に輝き、頭髪盡く天を指す)。……さ、これから岩殿へ押しかけるのぢや。味方は七十人か、五十人か、二十人か。敵は千か、萬か、十萬か、幾らでもよし。して、あの信茂の首を引抜き、それから古府へ引返し、信忠の首ぢや。して其の二つを、あの信長めの素ッ首を引抜く前に、先以て信長の面に擲(ぶ)つけてやるのぢや。さ、出發ぢや、具足を持て、太刀を持て……。皆もはやはや仕度を致せ、早くせぬかッ……。なぜ默りをる？　なぜ動かぬ？……此の勝頼の此の一念が通らぬとな？　身は矢丸に中つたならば倒れもせうぞ、槍や刀で殺されもせうぞ、魂が死なるゝか、死ぬるか……どうぢや。具足を運ばぬ？　よし、其儀ならば、(と急に凄い極みの靜けさになり、幽靈の様にすうつと自分で奥へ行かうとする)。

(貞村と平左衞門は勝頼の着物の裾を押へ、昌恒、常陸、麟岳等は或は顏をそむけたり、疊に顏を伏せたりして、忍び泣きしてゐる。——幕。)

第三幕　修羅道入口

主要人物

勝頼。信勝。松の方。彌生。昌恒。平左衛門。常陸。真村。麟岳。（皆既に第二幕に出たる人物）

内膳。又七郎。（共に第一幕に出たる人物）岩下右近。小原忠五郎。皆井小助。多田新藏。（四人とも十二三歳の少年）

右の外、武田方の足輕雜兵若干。

時

天正十年三月十日（第二幕の直ぐ翌日）、申の下刻（今の午後五時）頃より、翌十一日の夜明まで。

第三幕　修羅道入口

所

甲斐國東八代郡田野の東北のはづれと、天目山の半腹。

一

（東八代郡田野の東北のはづれ、日川の東岸。山徑ではあるが其邊だけ幅も廣く、傾斜も緩になつてゐる。右後方に川裾は蜿々と山谷の間を縫つて、遙かに鶴瀬の方へ走つてゐるのが見渡される。申の刻頃。）

温井常陸と安部貞村、共に甲冑に身を固め、槍を杖づいたり肩にかけたりして、右手より登り來る。）

貞村。さ、此邊で我々も少しく休み：お待ち申さうではムらぬか。（一寸後ろを振り返り）、大分お遅れに相成りをると見え、馬の蹄の音もまだ聞え申さぬわい。

常陸。此處はさながら平地の平道、休むには持つて來いの場所でムるな。（ずつと前方に來て下の方日川の水面を見おろす態）さり乍ら川は白泡飛ばし走り流れてをる事なり、すぐ又險しい登りになりまするぞ。（路傍の石を選み腰をおろす）どりや、お待ち申しまするかな。したが又上方勢の用心と來ては、險阻な山徑を不案内な爲めとは申せ、まだ鶴瀬までも參つてはをらぬらしいではムらぬか。

貞村（木の根に腰かけ）。用心よりも臆病ぢや。臆病なればこそ（と深い悲憤の情を抑へ）軍さに無縁の惠林寺を燒き、あの懐かしい快川和尚を虐殺し、無辜の婦女童幼を殘害して、それで威光を示さうといふ、見下げ果てた上方勢ぢや。

常陸。彼奴等と愈よ刃を交ふる段と相成るまでは、忘れた積りでをらうと思ひをつたるに、そのお言葉で……（勃として込み上げて來るらしい痛憤の情を抑へ抑へ）戰國亂世の習ひとして、民屋放火も家具家財の掠奪も、又田地作物の狼藉も、珍らしいとは申さぬが、今度の彼奴等の殘忍さは……殊に先手の將とかいふ川尻肥前とやら瀧川左近とやらの酷たらしさは……（川尻等を今眼前に置いてゐるかの樣に）うぬ、今に見てをれ……。

（馬蹄の音、かすかに聞え來る。）

第三幕　修羅道入口

貞村。いや、拙者が云ひ出して惡うムつた。今徒らに憤激の火を燃え立たしめて、我と我が身を燒き盡しては此方の損。やがて彼奴等に思ひ知らする時となる迄は、ぢつと耐へてゐりませうぞ。

常陸（苦笑し）扨て、いつ其時と相成るやら。よしや運よく川尻ぐらゐの素ッ首に（と太刀の柄を一寸握り）これを喰はしやる場合があるにもせよ、それしきの事で我々の此の腹の蟲が、ヘン、何と承知を致さうか。せめて信忠の陣にでも斬り込む事が叶ふなら、まだ諦めとも相成るが。（立上り）や、もう上樣がお來でに相成りましたぞ。

貞村（同じく立上り）我等の太刀や槍先は、如何に奮闘激戰すとも、此處より古府の信忠の陣まで達く道理はないが、美濃岩村に在陣の大將信長の胸もとにも、我等の凝つた此の一念が、ぐさと立たずにをるものか。

（間。勝頼、信勝、松の方の三名は馬上、その餘は徒歩で前後に從ひ、右より登場。前に昌恒、次に平左衛門。平左衛門は武田家の旗を卷いて立てながら持つてゐる。足輕二名。後ろに麟岳、小原忠五郎、皆井小助、腰元三四名、その中に彌生もゐる。足輕雜兵等若干

縮く。すべて四十餘名。勝頼馬を止め、一行亦それに倣ふ。）

勝頼（人を信じかねる目つきと口調で、馬上より常陸等に）。ずんずん先きに行つてしまうたではないか。逃げ度い所存で折角急ぎながら、一寸休んでをる所を、斯うして此身に追ひつかれ、今更逃げうにも逃げられずといふ譯合か。ヘン、御遠慮なくお逃げなされぢや。（誰も答へない。流石に勝頼自身少し恥ぢ）それとも待つてをつたるか、此身を待つて呉れをつたるか。

平左衛門（反抗的に冷笑し）。逃げ度さに急いで行つて、誰が休みなど致しませうぞ。なあ、溫井殿、安部殿。先立ちとして一二丁前に行けとのお言葉を、上樣御自身、はやもうお忘れなされましたと見えまするぞ。

勝頼（憤然とするが、又自分で制し、どぎまぎと）。それゆゑ待つてをつたかと云つたでないか。（極り惡さを紛らすべく）いや此身も待つてやると致さう、まだ後より足弱どもも參るらしいぞ。して、一休み致さうわい。今日中にはまさかに敵も寄せまいしな、（又漫ろに不安を覺え）それとも攻寄せ來るであらうか。

常陸（勝頼のその不安な様子をまね、滑稽な顔つきをして）。さやうに仏りまする、どうも攻寄せ參りさうで仏りまするなあ。

勝頼（常陸のその言葉は耳に入らなかつたかの様子を装ひ、どぎまぎと馬より下りる）。松の方、信勝（共に下馬する）。

（一同その邊によろしく休む。）

勝頼（又不安さうに四方を見廻しなどする）。どうも昨日の夜から以來、四方の山の姿までが、變に氣味悪く押し默つて、脅かす様に聳えをる。いつそ早く夜になつて、何も見えなくなつてしまへば好いに。

常陸。早く暮るれば早く明けうし、そして「死」といふ怪物が愈よくわツと大口あいて、たゞ一呑みと參りませうわい。

貞村。さすればそれにて永劫あけぬ夜となり、愈よ何も見えず相成り終りますかな。（と云つて彼自身も一寸しんとした氣持を覺える。その氣持は他の一同にも及ぶ。）

昌恒（氣を取直し、手を額にかざして右後方を見おろす）。なる程、誰やら二人やつて來るわい。うむ、岩下右近に多田新藏かな。

平左衛門（同じく見おろし）。えツちら、おツちら、登つて來るわい。何と云つても、まだ年齢も行かぬ子供達ではある事なり……（と云つて少し顔をそむける）

彌生（同じく見おろし憐む）。それに又、さぞやあの荷は重からうに……。

小原忠五郎（皆井小助に）。我等二人で持つて來てやればよかつたになあ。

皆井小助。これからさきは我々が代つて持つて行くとせう。

勝頼。まさか敵ではあるまいな？　小さく見えるは遠い爲めではあるまいた？　敵の間者ではあるまいか？

常陸。（再び自分も不安を覺えた風を裝ひ、滑稽に）如何にも、如何にも、敵の間者でも仏りませうぞ。臣下の者の忠不忠をお取違へになるのみならず、今はその顔形をすらもお見損ひになる様ではな。

勝頼（憤然として）。何を申す、無禮至極な！　似た者は多いぞ。それに又、戰さをするに當つては、注意の上にも注意が重ね、用心を加へてこそ、進退すべきものではないか。

常陸（ハツと首をすくめ、恐縮した様な滑稽な身振りで獨語）。いかさま御道理、御尤も。いやいや御無理御尤もか。あんまり調子に乗り過ぎて、桟が出過ぎた此の常陸、コツンと一つ喰はされたか。とは云へこれでも、隨分氣樂にのんびりと物が云はれる、息がつかれる時代となつたものぢやなあ。

信勝（小助と忠五郎とに）。もう直ぐそこに參つたぞ。彼處より此處まで、其方達二人であの荷は持つて來てやるがよい。

（小助と忠五郎、右の方へ退場。）

勝頼。よもや、あの何ではあるまいな、忠五郎等は……。いやいや、さやうではなし（と自分で急ぎ取消す。そして、その氣拙さを紛らすべく、急に思ひついた様な調子で）さうぢや、さうぢや、信勝、此方へ！

（足輕の一人が勝頼の前に熊の皮を敷く。）

信勝（熊の皮の上に坐り、父に對する）。

勝頼（鹿爪らしく）。何やらかやらの心づかひに絶え間がなく、つい此の通り云ひ遲れたが、そなたは此處よりの落ち延びるがよい。御旗、楯無を足輕一名に持たせ、此處より山續きに武藏へ出で、それから出羽奥州へ向ふもよからう、そして時節を見計らひ、武田家再興の旗を擧げるがよい。都合によつては、越後の喜平次景勝を頼りなされい。景勝は此身の旗下の格ではある事なり、そなたに取つて叔母聟でもある事なれば、まさか頭を横には振るまい。な、そして織田德川を打破り、一つには武田家を再興して武名を天下に輝かし、一つには此の勝頼の鬱憤を晴らして下され。よいかな、頼みまするぞ。

一同（傾聽）。

信勝（少し考へてから）。折角のお言葉ではムりますれど、拙者はそれに從ふ事は出來ませぬ。お家斷絶は悲しい事に相違はムりませねど、あの景勝が拙者を護り立て呉れうなぞとは、到底考へる事も出來ませぬ。如何にも景勝は父上のお蔭により、景虎叔父（と云ふ時松の方をちらと掠め見る）に打勝つて、謙信の跡を取つたではムりませう、そして金銀寶玉の賄賂により、菊叔母上をもお迎へしたではムりませう。さり乍ら最初より景勝は、たゞ武田家を一時の凌ぎに味方とする所存であつたではムりませぬか。敗殘の武田の落人を、何の醉興で護

り立ててなんぞ呉れませう。(短い間)又あてもなく出羽奥州とさまよひ歩いて何になります。今迄とても、頼みにならぬ事を頼みにし、あの古府で此の度殺されたる下方彦作の言葉の通り、ぢりぢりと山奥さしてお逃げにばかりなつたればこそ、斯様に惨めな場合となつたではムりませぬか。新府城を枕にして潔く御決戰となりましたならば、もつともつと、どれだけ立派な戰ひが出來たか知れませぬ。あゝ拙者はそれを思へば、殘念で殘念で堪りませぬ。

勝頼（腕を拱いて無言）。

信勝（少し間をおいて）。拙者の様な弱年者の云ふことは兎角出しや張りの様にも聞えませうが、今から思へば、あゝ、あの小宮山内膳が、地團駄蹈んで無念々々と申せし通り、折角景虎叔父上へ援軍をお出しになりながら、そして景勝を散々お破りになりながら、金銀にお目がくらんで、景勝と和睦をなされ、たうとう景虎叔父上を見殺しなされたのでムりますもの、斯様になるのが天罰と申すものでもムりませう。

勝頼（やゝ良心の苛責を覺えつゝ、厭味式な口調で）。それは皆この勝頼の愚かな爲めぢや。それは云はずと知れてをる。さり乍ら、もうはや今と相成つては、そなたが武田家再興の爲め此處を去るのを厭ぢやとならば、無理にもさうなされとは云はぬわい。それゆゑ過去の事までも、さやうに並べ立てずともよい。さやうに親を恥しめ罵るばつかりが、そなたの能ともなるまいし。

信勝（禮をして、もとの座に戻る）。

勝頼（半ば獨語）。さやうに云つて呉れずとも、昨夜の馬の生首だけで、もうもう頼勝には澤山ぢや。妖怪變化ぐらゐのものを、恐れは決して致さぬが、たゞ變に斯う暗い氣持がするものぢやわい。(間。氣を取直し、松の方の方へ身を少し捻ぢ向けて云ふ。松の方も少しく膝を進める)そなたにこそ早く云ふべき所であつた。今信勝よりもお叱りを頂戴致した通り、此の勝頼は四年前に目前の利に心が昏み、景虎殿を見殺しにして、義兄上氏政殿と鉾楯の間とは相成つたれど、そなたは血を分けた兄妹ではある事なり、勝頼の遺言と云つて、これから行つて縋つたならば、情誼に厚い義兄上が、どうしてそなたをふびんと思はぬ事があらう。(前方を指さし)あの大菩薩峠を越え、小菅川に沿うて下れば、武藏國は直ぐぢやによつて、それより相摸へは雜作はない。な、さやうになされ。そして此身よりも義兄上に宜しく傳へて

慾しい。して我々父子の菩提をゝ弔つて慾しいものぢや。(足輕等の間へ向ひ)、おい、劍持、劍持但馬、何處へ參つた？

松の方（稍やつんとして）。もう二た時ほど前に、劍持は相撲へ向つて發ちました。昨夜の間者と同道で發ちましたのをどうして上樣は御存知でなかつたやら。切つて取らせた私の髪を、私の身代りとして持つて參りましたのは、あれは誰でムりましたやら。もうもうさやうな無駄事は、お聞かせ下されませぬやう、お願ひ致しておきまする。

岩下右近、多田新藏（少し喘ぎつゝ一行に追ひつき來り、休む）。

貞村、平左衞門（右二人をいたはる）。

勝頼（短い間。やゝ離れてゐる麟岳に呼びかける）。麟岳御坊、少しの間これへ！

麟岳（勝頼の前に進み出る）。

勝頼。只今そなたも聞かるゝ通り、信勝も內室も、あの樣に申し、此身の言葉に從はぬゆゑ、そなたも自然同樣な答へをされうも知れぬがな、そなたこそ出家の身として、此處までお見屆け下されたのは、もうこれで十二分のお志と申すもの、どうぞこれよりお歸りなされ、々一同の冥福をお祈り下され。さ、さ、これからお歸りなさるがよい。

麟岳（不安）。敎への爲めを思ひますれば、一日も多く生き長らへ、法の道をば修めるが當然にてはムりますれど、……。(勝頼の氣色を損ねはしなかつたかと危ぶみ、急に調子を替へ）いや、さり乍ら桑門としても、代々の御厚恩をば忘るゝ事は相成り申さぬ。それ故に拙僧としては此際僧俗の別はないかと考へまする。はい、未來永劫、冥途黃泉までもお供を致すでムりまする。(餘り立派に云ひ過ぎて、失策つたといふ心持を隱すべく、少しどぎまぎしてゐる)。

勝頼（滿足に思ふ心を押し隱し）。方々のさやうなお志ならば、是非もないわい。それにしても此の勝頼は、抑も何の德があれば、さやうな厚い志をば受けるのやら。

麟岳（もとの座へ戻る）。

常陸（皮肉に、獨白）。全くぢや、上樣には抑も何のお心があれば、さやうな厚い志をば、今更おためしになるのやら、お確めになるのやら。へン、もう斯うなつては、誰も落ち延びようと思つても、落ち延びられぬ事くらゐ、疾つくに分つてをるのでな。いやはや、どちらも厚過ぎるお志と云ふものかな、ハハ。

平左衛門（常陸に調子を合せ）。お心細い故の事、死が怖ろしい故の事ぢや。さり乍ら、それは我々みんなも同じで、親に貰つたかけ替へもない大事な命を惜むのが、何も上様お一人だけに許された事であるとも云へまいし……。

（此時、小助と忠五郎追ひつき、荷を其邊に置いて休む。）

昌恒（又右後方を見おろし、やゝ緊張の表情で）。や、又ずつと下の方より、誰やら二人登つて來るが、もう足弱の者共も、ほかには居らぬ筈であるに。

勝頼（不安）。此度こそに敵であらうな？　したが二人きりぢやとな？　敵の忍びの者などもぢやな？

平左衛門、常陸等（共に右後方を見おろす）。

貞村（熱心に視力を凝らし）。どうやらあれは、馬場美濃殿の歩き振りに酷う似てをるがな。して又一人は、息子民部少輔の様にも見ゆるが……？

信勝（同じく瞳を凝らし）。や、此方を見た。手を擧げて合圖をする様ぢや。云ふ迄もなくこれは味方ぢや。鎧を着けてをるでもなし、脊負ひをるのが鎧櫃かな？（信勝も片手を上げて合圖をする）。

松の方（漫ろに）。あの小宮山ではないか知ら……（自分に復り）いえ、私何を云つたやら。さやう、少うし様子が違ふ。でも、誰であらう？　味方の人には相違ないけれど。

勝頼。小宮山ぢやとな？　冗談を云ふものではない。ハハハ。初鹿野傳右衛門ではあるまいか。味方の者なら兎も角も待つて遣はす事に致さう。

平左衛門。初鹿野よりはずつとずつと上品な武士らしく見えまするがな……？　あいた、あの出ツ岬で見えなくなつた。

（それで一同は又此方へ向き直り、別の話をする。彌生たゞ一人は依然として身動きもせず、右後方を見詰めてをる。）

麟岳。小宮山なぞが、何しに參りませうぞい。傲慢不遜のあの男、今となつては上様の此の御難儀を、好い氣味に思ひ、舌でも出してをるでムらう。

勝頼（貞村に）。昨日駒飼に參り供をしたいと申したは、馬場民部であつたのぢやな？　馬場に屋代に山縣ぢやな？　むう（と少しく後悔の態）許して供に加へる方がよかつた様な氣持も

するわい……。もう、まさか、あの三人も來て呉れるではあるまいし、來ようとしても來られまい。昨日もせめてあの三人に、會ふだけにても會つてみればよかつたになあ。

貞村。お會ひになつた其上で、尙ほお疑ひが晴れぬため、それでお戻しになつたのならば、心殘りも先づ無い譯でムるがな。

勝頼。つい少し前に、あの秋山攝津めが、あの樣な去り狀などを遣はしくさつた其爲めに、此身の心は疑心暗鬼が一ぱいに充ち滿ちをつた矢さきではあり……あゝ良からぬ事を致したわい。

平左衞門（やゝ低い聲で常陸に）。如何でムる、妙に上樣が感心なことを申されるではムらぬか。

常陸。明日雨にでもならねば宜しうムるがな。――ところで、あれからあの三人は、何とされたでムらうな？　あれでは宛で敵方へ降參せよとのお言葉と全く同じでムつたからな。

平左衞門。降參なぞして生き長らへるあの三人であるならば、何の我等もお取次ぎをば致しませうぞ。駿河か又は相模へでも落ち延びられてをればよいがな。

信勝（誰にともなく）。一體あの樣な秋山攝津を、どういふ譯であれほどに御信任なされてをつた次第やら。

勝頼。もうもう攝津の事なんぞ、一切云はずに置いて呉れ。あの樣な去り狀なぞを寄越しくさつて……（と又憤激しさうになる）

常陸。いえいえ、あの樣なものでも寄越すだけは、まだ相濟まぬといふ心があればこそではムるまいか。

（一心に右後方を見やつてゐた彌生は、此時電氣にでも擊たれた樣に、はツとして左へ引退き、人々の後ろへ隱れる樣に入る。）

右近。忠五郎（共に右後方を見おろしてゐたが、殆ど同時に叫ぶ）や、あれは小宮山樣ぢや。小宮山の御兄弟ぢや！

平左衞門。なに、小宮山殿？　出ツ岬の此方に相見えたかな？（と走り行き、見おろす）うむさうぢや、小宮山兄弟ぢや。（抑へつけた喜悅の聲）小宮山兄弟が參られるぢやな。

昌恒、信勝、常陸、貞村、勝頼等（殆ど同時に右の方へ走り見おろす。口々に）。何ぢやと？　何、小宮山？　あの內膳殿？　友信殿？　何？

（一同深いショックを受け、少しの間そこに釘付けにされた様に佇立、無言。それから深い溜息。勝頼は頭を垂れて悄然と左の方へ戻る。）

常陸（勝頼の傍へ行き、やゝ低い聲で）。あれをも上様はお疑ひになりまするかな。

勝頼（無言、たゞ顔をそむける）。

常陸（半ば獨語、感慨の籠つた口調）。最後のお供に來たのでなうて、外に今さら何の用事がムらうか。それにしても、よくまあ來て呉れたものではある。

勝頼（頭を垂れたまゝ）。此身は彼には會はれぬわい。長の暇をやつたでないか。

常陸。男らしくお詫び……いや、お取消しになればよいではムりませぬか。

（昌恒、平左衛門、貞村等も、低い聲で頻りに感嘆の意を洩らしてをる。麟岳は極り悪げに、人々の後ろでもぢもぢしてゐる。松の方は急いで彌生の傍へ行き、彌生の手を取つて少し俯向き、無言。間――）。

（昌恒等の感嘆の囁きが已み、小宮山内膳正友信、少し後れて弟又七郎共に鎧櫃〻脊にし、袋を嵌めた槍を杖づき、少し喘ぎつゝ右の方より登場。）

内膳（昌恒に）。土屋殿、お久し振りでござる。（鎧櫃を傍におろす）。

昌恒（幾らか勝頼を憚る様に）。誠にお久し振りでムる、お懐かしうムる。

平左衛門（進み寄つて内膳の手を取り、少し吃りつゝ）。小、小宮山殿、お、お懐かしうムるぞ。（顔をそむける。）

内膳（も一寸顔をそむけるが、直ぐ又氣を取直して屹と）。安西殿、土屋殿、さ、どうぞ御勘氣御許しの程、お願ひ下され。さなくば拙者、お直きにお願ひ致しまするぞ。

昌恒（勝頼の前に行く）。

常陸（内膳の前に來て、その手を取り握り締める）。小宮山殿！

平左衛門（低い聲で傷々しげに、尙ほ少し吃りつゝ内膳に）。な、な、なんといふお變り様でゞさるぞ！

貞村（吃りはせぬが、同じく）。見違へる様にお痩せになりましたなあ。

常陸（同じく）。お顔も色のわるい事。又七郎殿も御同様。

内膳（強ひて少し笑ひ）。なあに、もうこれで大分よろしく成り申したちや。

（足輕雜兵等も、小宮山兄弟を知つてゐる者は、皆二人の傍に來り、懷しげに心々を私かに述べる。兄弟もそれに應じ、感謝の態。）

昌恒（勝頼に）。上様、あらためて拙者よりお願ひ致す迄もムりませぬ。御最後の御供に參つた小宮山にムります。御勘氣お許しを待ち居りまする。我々一同も待ちをりまする。

（一同無言。緊張。）

勝頼（無言。それから再三何か云はうとするが、又口を噤んでしまふ。かなり長い間）。

昌恒（迫る）。上様、おゆるし相待つて居りまする。我々よりもお願ひでムりまする。こればつかりは我々一同、お許しを得ずにはおかれませぬ。

勝頼（辛うじて絞り出す様に）。……此、此身が悪かつた……。（顏をそむける）

（一同又しんとした氣持に襲はれる。内膳はつかつかと勝頼の前へ進み行き、勝頼の手を取る。二人とも立つたまゝ暫く無言。）

内膳（それから又靜かに常陸等の傍へ歩んで來て）。さ、これで又四年前の友情に成り申したぞ過ぎ去つた事は致し方なし。女々しい愚痴や感慨は、もうもう一切云はぬこと、云はぬこと、拙者も聞くまい。御厄介でも皆々がたの死出の旅路の路連れに、又昔のまゝの意地悪ものが舞ひ戻つて參つた次第。（又七郎の傍へ行き）、さ、そなたの取越苦勞は不要となつた、此の通り立派にお許しを得たからは、そなたは早く戻つて欲しい。

又七郎（躊躇。少し涙を浮べ）。とは云へ……とは云ひ乍ら、拙者は妻子の事よりも……このまゝ兄上と御一緒に……。

内膳（叱る）。馬、馬鹿なッ……さやうな子供じみた心で何とする。此の兄を思ふ心があるならば、兄の魂を思ふ心があるならば、早く戻つて國若を見て呉れるがよい、さ、早く、早く。

又七郎（澁る澁る又自分の鎧櫃を背負ひ）。然らば兄上おさらば！　皆様、おさらば！　これが生き殘る又七郎より、死ぬる皆様への言葉であるか、あゝ、おさらば、上様！

貞村、信勝、常陸、昌恒、平左衛門（殆ど同時に）。おさらば！　何卒御機嫌よろしく！　おさらば！　おさらば！　御機嫌よろしく！

勝頼（稍や離れた儘で、併ししみじみと）。さらばぢや、どうぞ達者でな！

内膳（又七郎の手を取り）。よいかな。又七郎、お亡くなりになつた御両親のお心を、忘るる事は相成りませぬぞ。國若を頼みまするぞ。さらばぢや！

（又七郎は一同と別れ、右後方へ下りて行く。内膳をはじめ常陸等默つて見送り居る。日は次第に暮れかゝる。）

麟岳（内膳の傍へ進み寄り）。貴殿に對し、拙僧も面目ムらぬわい。あの訴訟では、出家のくせに、つい小山田將監の肩を持つたりなぞ致し……。それにしても。斯うして最後のお供に參られた貴殿の心、あゝ、拙僧が今日までの生涯中、これほど感じ入つた事は又とはムらぬ……。

貞村。隙を見ては落ち失せる者のみ多いその間に……。

勝頼。仇に報ゆるに恩を以てするとはそなたの事ぢや。（感情的に）、とは云ひ乍ら、よう來て呉れた、ようもそなたは、あゝ、ようもそなたは、此の勝頼を捨てなんだなあ！

内膳（少し皮肉な微笑を浮べ）。折角御難儀の上様を、空しく棄ててしまひましては、その所謂仇に報ゆるに恩を以てする譯には參りませぬでな……。ハハハ。さり乍ら、あんまりお褒めに預ると、此の内膳も増長して、今に大に駄々を捏ねまするぞ。それよりは、戰さの手筈を伺ひ申さう。まさか此處にて敵軍をお待受けでもムるまいし。

（あたり次第に暗くなる。）

常陸。小勢で陣取るに屈强な要害と、先年見込みをつけた所が、此の奥の（左上の方を指差し）天目山の五合目ほどにムるによつて、敵をば待つは既に彼處と相成りをれど、要害よりも何よりも、貴殿がお一人加はつて下されし爲め……

平左衛門。百萬の援軍を得たよりも……

昌恒。味方の士氣が如何ばかり振ひ立つやら知れ申さぬ、味方の一致團結が又如何ばかり鞏固になるやら知れ申さぬ。

貞村。此の現世での結合は、よしや今日が最後であればあれ……。

（と交々感激を述べてゐる間に、舞臺をはる。）

二

（舞臺が廻りやむと、青黑い幕が垂れてゐる。間もなく幽かに或る音樂が始まり、徐々に其の高程が加はる。それは九州の北部地方に昔から傳はつてゐる浮立の樂に似たもので、沈痛と悲壯と凄愴の調子が強く出てゐなければならぬ。その樂は少くとも十分間の繼續を要する。幕の色は樂の音が近く高く聞え來るに連れて次第に明るくなり、赤みを帶び、後には一面燃ゆる樣な眞紅となる。樂終るに從ひ幕の色も亦前の通り青黑くなる。そして程なく幕は撤去される。）

（天目山の半腹、山嶺重疊の間に少し平らになつてゐる地點。雲間の月が一寸姿を現はして、遠近の景を照らして見せる。日川の裾は遙か彼方に仄かに光つて見える。月が雲に入ると、再び靜寂陰暗の景。篝火が左右に一つづゝ焚かれ、その焰の後ろには楯板が一枚づゝ立てられて、彼方より見えない樣にしてある。左端後方に武田家の定紋ある幕を張つた所が半分ほど見えてゐる。十一日の丑寅（今の午前三四時）の刻。）

（女性を除き、勝頼、信勝以下一同、大きい圓を成して並び、水盃の場。勝頼、信勝、その他二三名は床机に腰かけてゐるが、鎧櫃などを代用してゐる者もあり、岩や木の根にかけてゐる者、全く胡座をかいてゐる者もある。皆甲を着てゐる。小原忠五郎、酌をして廻る。）

勝頼（一同に向ひ）。さ、これで愈よ今生の別れぢや。（盃を干し、信勝にさす。そして又一同に向ひ）もう攻上り來る敵を待つより外に用はない。此身の代になつてより丁度十年、これでも多少の抱負は無いでもなかつたれど、すべて事志と違つて此の始末。それにも拘らず一同には隨分働いて貰つたわい。

昌恒。さやうなお言葉を戴きますれば、我々一同、地にも入り度い位に恥かしう厶りまする。我等の働きも足らなんだ故にこそ、斯樣な非運とも相成りましたに。

勝頼。勇將の下に弱卒なしとは申せども、此身の如き愚將の下には、賢臣も空しく朽ちてしまふのぢや。あゝ濟まなんだ、濟まなんだ。

平左衛門（盃を常陸にさしながら）。さやうなお言葉を戴くにも足る賢臣などといふものは、何

處にも滅多にはムらぬが、今上様のお心がさやうにお成り下されたとは、なあ渥井殿、我等に取つて何といふ有難い事でムるやら。

常陸。敵を退け城を落した嬉しさよりも、此の有難さ嬉しさが、秤にかけて量つてみても（と二つの物を秤にかけ量る手つきをしながら）、おゝ何といふ重い目方でムるやら。

内膳（常陸より受けた盃を干しつゝ）。共に同じき此國の水をば飲んで育つた我々、詮ずる所血も肉も即ち此の水のお蔭であるが、もうこれで飲み納めでムるかな。（雲薄らぎ、月の光おぼろに照る）。

平左衛門。して又斯様に共々に、末期の水を飲み合ふ程の親しさは、又とは滅多にムらぬぞ。

貞村（主として勝頼や常陸等に）。なあに、軍さには勝つても、領地は廣く切り取つても、君臣の間にも、士民上下の間にも、まことの親しみや信頼が無く、疑心暗鬼の絶間が無くば、人間まことの仕合せが、どうして其處にムらうぞ。

常陸。小田の蛙か徳川の、いやどぶ川の川獺か、さやうなものが間もなく天下を取るにしろ、どうせ内輪の百鬼夜行は知れた事。

貞村。表面だけ無事太平を装ふとも、缺點も過失も上下が思ひきりよく曝け出し、改め勵んで行かざる限り、やはり愚かな空威張りと、牛馬の様な屈從のほか、何が彼等に殘りませうぞ。

内膳。やゝともすれば、却つて無事太平の時代の方が、「死」といふものを正面に見る事少いだけに、此世の生に狂れ倦み、何につけても眞劍な深い心が容易に持てず、學問といふものは兎角臆病者の逃げ場所となり、臭い物に蓋ばかりして、悲慘な滑稽た淺間しい事ばつかかりを生み出し勝ちなものでムるて。

平左衛門。それを思へば我々は、今は一同或る仕合せを受けをる様なものでムるな。（空を仰ぎ）あゝ好い月ぢや。雲はすつかり晴れたる様子。これも見納めか。むう、好い氣持ぢや。

昌恒（同じく月を仰ぎ）。あゝ、あまり氣持が好い爲めに、妙に涙さへ出さうぢやわい。

（勝頼、常陸、内膳等も皆月を仰ぐ。盃は此時是輕等の間に廻されてをる。空は拭つた様に晴れて、月光愈よ明るい。一同、しんとした氣持になる。）

勝頼（感傷的に急に内膳の手を握り　再三何か云はうとしては又自ら抑へ抑へした上で）。これ内膳、そなたは何と思ふぢやな、此身は心が今妙に、しんと深く相成つたが、抑も人間は何の

爲め此世に生れて來たのであらうな？

內膳。さやうなお尋ね事ならば、あの（と麟岳を指差さうとしたが）……いや、あのお方の繩張りは後世安穩でムつたな。さやうでムりまするなあ、（と一寸考へ）詰り死ぬ爲めでムりませうな。成るだけ氣持よく死ぬ爲めにな。

（內膳と勝賴との會話を、他の者は皆時に或は訝つたり、多少肯いたり、又は感心したりしながら、兎も角も深く考へつつ聞きをる。）

勝賴（少し考へてから）さやうかな。さりとすれば勝賴は、もう隨分と氣持よく死ぬるを得るであらうと思ふぞ。斯樣に皆と心の底より打解け合うて話など交ふる事となつたでな。あゝ好い氣持ぢや。心にかゝる雲も無しとは、斯樣な氣持を謂ふのぢやな。

內膳（少しく不平さうに）。然らばもうはや上樣は、織田や德川、或は小山田出羽以下の叛逆人等に對しても、恨みも憎みも一切合切、さらりとお捨てになりましたかな？

勝賴。さあ、それは……正直に申すとすれば、まださうとは些か云ひかねるわい。

內膳。さり乍ら彼奴等の今度の襲來も、又內通も裏切りも、もともと上樣の所爲ではムらぬかな。

勝賴（少しどぎまぎと）。むう、さう云はるれば一言もない。さりながら、それもその……それゆえ程なく、さらりと捨ててしまふわい。

內膳（少しく進み寄り、次第に苛烈な言葉づかひになる）。さらりと捨てておしまひになる？——然らば今一つお尋ね致す、此の國內の民百姓が、年が年中、筋も立たざる戰爭に、穀稅血稅を絞り取られた揚句のはて、とどの詰りは斯樣な悲慘な有樣となり、現に卑劣な暴虐な敵軍の爲め、如何ほど非道な目に遭ひをると思召すぞ？　又國民の大部分が、長坂跡部を筆頭とせる醜の輩を見習つて、我利々々一天張りの氣風を釀し、心の上でも形の上でも、そも如何ばかり淺間しい慘め極まる其日々々を送つてをると思召すぞ。斯樣な事をも今、上樣は、さらりと綺麗にお忘れになり、たゞ御自分お一人だけ、氣持よく死ぬると仰せられまするかな？

（又雲が少し出て、月の光を弱くする。內膳と勝賴との言葉づかひが激しくなつたりする都度、足輕等は盃を手にする事を躊躇する。）

勝頼（憤然と）それゆえ愚將の勝頼と、申したでないか。して、そなたは、此身を愚弄致す爲め參りをつたか？

内膳。何でムるな？　フン、如何にも、聞きやう取りやうでは、愚弄の爲めと思召すも好し、さり乍ら、拙者の言葉が愚弄にもせよ何にもせよ、これで上樣の淺ッぱかなる感慨が、些かにもせよ深くなりさへ致すなら、それで好いではムらぬか（短い間）。恨みも憎みもさらりと捨てる？　フン、詰り上樣が御自分だけの小ぼけな御損をお詫めのお積りゆゑ、さやうな淺ッぱかなる感慨も出るといふもの（短い間）。又、織田徳川や叛逆人等の非道をば咎むる力がはや上樣に無いとても、上樣御自身の今迄の惡業非道は決して決して、消えも滅びも致しませぬぞ。實はその差別がお望みにてもムらうなれど、さやうな一人きめのお身勝手なる差引にて、人間の罪が帳消しになり、それでさらりと氣持よく、極樂往生といふ御所存かな。フン、（麟岳に）麟岳殿、貴僧のお畑では如何でムる？（月は又全く雲に隱れ、邊り暗くなる）。

勝頼（太刀に手をかけ、憤然として身を顫はし）。そッ……それ故にこそ、此身が行くは地獄の中ぢや。地獄の中へ眞逆樣に落ち行くばかりぢやッ。

内膳（ハタと自分の膝を打ち）。それぢや、それぢや。それでこそ、拙者が胸の溜飲も、ぐいぐい下つて參るといふもの。（短い間）、いやなに拙者の溜飲は如何にもあれ、他には我等の蹈むべき道は斷じて一つもムらぬわい。さ、大阿鼻地獄の眞ッ只中へ、悦んでお供を致しませうぞ。人間の持つて生れた醜と惡とは、其死と共に消え去るものでは決してムらぬ。それぢやによつて、小さな悟りや諦めに隱るゝ弱者ならいざ知らず、さもない限り己れが身に持つ其の醜惡と、永劫の惡戰苦鬪を續け行くほか、道は決して決してムらぬわい。

（重苦しい、人を壓倒する樣な間。）

平左衛門（半ば嘯く樣に貞村に）。あれが上樣をたゞ愚弄する爲めに來た者の言葉でムらうか？何やら知れぬが小宮山殿の胸中に燃えをる烈火、拙者は見る樣な氣持が致す。

貞村。して又小さな淺はかな悟りや諦めに兎もすれば陷り度がる我々を、何と餘人が救ひ出して呉れまするぞ。

勝頼（再三深い溜息をつく）。

内膳（苦笑し）。又もや拙者は偉いこと褒められてをる樣子でムるな。拙者は今日まで上樣を、

殊に御勘氣を受けて以來の此の四年が間といふもの、憎んだの憎まぬのと、そりや言葉には盡されませぬぞ。それでも拙者をおのおの方は、やはりさやうに褒めそやし呉れらるゝかな？

昌恒。そのお憎みといふものも、つまる所は上様の爲めをば深く思はるゝお心ゆゑでは厶らぬか。

常陸。まさか貴殿が上様を（と太刀を振りかざして斬り殺す手振りをし）とでもお考へなされた事はあるまいし、ハハハ。

内膳。ハハハ、たゞそれしきの事により滿足される位に淺い拙者の憎みで厶つたならば、ハハハ、そりや好かつたで厶らうが……。

（一同少しの間、深い呆氣に取られをる。又自分等の耳を疑ふ樣な氣持もある。）

平左衛門（無理にも何かを排しのける樣な調子で）。いやいや、何と貴殿が云はるゝとも、如何に貴殿が上様を深くお憎みなさるとも、又よし武田御一家をさへお憎みあるとも、兎にも角にもわざわざと斯うしてお供に來られたからは、そのお憎みも詮ずる所、上様の爲め、武田一家の御爲めを思はるゝ所のお心が、卽ち根元にては厶らぬか。

貞柱（平左衛門に調子を合せ）。又此の國の爲め、此國の士民上下一同の爲め、延いては人間一般を愛しまれるお心が本になつての其のお憎みでは厶らぬか。

内膳（やゝ氣短かに）。誰の爲めぢやの、何の爲めのと、さう煩うては眞平御免ぢや。「我」といふものを投げ棄てて斯く馳せ參じた内膳ならば、忠臣とでも義士とでも、幇間とでも藪とでも、せいぜいお褒めなさるがよいわい。フン、卑屈な……。

昌恒（怪訝と非難の表情。獨語）。さり乍ら、一國の滅亡といふことは……

内膳。先づ好い氣味で厶るしな。

常陸（内膳に。然らば貴殿のその「我」とは、今もやつぱり上様に對し、あくまで所謂溜飲を下げてをらるゝ事で厶るか。（短い間）、通常我々の溜飲ならば、尤も我等はさう甚い胃病持ちでも厶らぬが、憎い相手が弱つたり死んだりすれば、はや夫れだけでもう充分下つてしまひ申すのぢやが、貴殿は御自分の命も其處に投げ出して、寧ろ相手を助けても、一層深い氣味好さを……？（と云ひさして内膳の顔をのぞき込む）。

内膳（一語一語に力をこめ、音を延べて）斯樣な氣味好さを味はふ爲めならば、命も惜しうは

ムらぬわい。虎穴に入らずむば虎兒を得ずぢや、ハハハ（と自分を嘲る樣に鋭く短く笑ふ。）

（一同また沈思。深い溜息をつく者もある。稍や長い間。）

真村（溜息をつき、獨語）。おう、扨ても扨ても、飽くまで物を愛しむ者は飽くまで又憎む！

して其の極は……？

內膳（揶揄の樣に、又眞實の樣に）。いやいや、どなたも、何やら大層むづかしさうに考へ込むではムらぬか。なあに斯ういふ內膳とても、いや見樣によつては內膳とこそ、最も素直な從順しい、謂はゞ一頭の小羊ぢや。先祖代々苦樂を共にし、希望を共にして來た所の人間同志の關係を、誰が抑も斷ち得ませうぞ。如何に拙者が傲慢不遜な男と見えても、此の關係からだけは、悲しい哉、のがるゝ事が叶ひ申さぬ。

信勝。昌恒（特に內膳に尙ほも何やら問ひ度げな顏つきをする）。

內膳。小山田出羽や梅雪齋も、なるほど叛き裏切つて、主從關係は斷つたでムらう。さり乍ら此の人間關係を、抑もどうして斷たれまするぞ。叛逆と云へば、當世流には何やら斯う偉い樣にも思はるゝかは知らされど、小才を利かして己れを賣り、新規に他の支配者に平伏頂首するのでは、何とみじめな淺間しい滑稽けたものではムらぬか。今に言語に述べ難い苦しい寂しさを見て死にまするぢや。（短い間。自己辯護の樣に稍や低く半ば獨語）勝頼公のお身の中にも、我等の先祖が知らず識らずに憧れをつた、謂はゞ何かの尊い光を、求め度いとのお心が、何處かにほんの少しなりとも、屹度あつたに相違ない。したが、どうして何處にそれは隱れて行つてしまつたやら。

勝頼（溜息をつき）。いま先き常陸や真村が、織田德川の天下になつても、道理にもとる空威張りと、牛馬の樣な屈從では、上下の和合は空ぢやと云うたが、此身の治めた甲州は、それが尙ほ一層ひどかつたのぢや。してその樣な屈從の氣風をはぐくみ育てたは、道理知らずの本尊たる此の勝頼であつたのぢや。斯樣な木偶が滅びずに、世に又何が滅びるぞ。——尊い光を求むる心？　ヘン、勝頼の求めたものは、同じく光は光でも、糞蠅の光の樣な光であつた。して、それで偉いと威張つてをつた。（短い間）あゝ、これでは地下の先祖の靈に、我等一同の先祖の靈に、合はする顏は全く無いわい。たうとう腑甲斐なしの勝頼が、さうして國を誤つたかと思召したら、父上信玄公の魂も（麟岳の方を顧み、その慰めを求め度げに）何と致

して浮ばれようぞ。

内膳（麟岳が勝頼に何か氣休めを云はうとするのを遮るべく、進み寄つて勝頼の手を取り、吃とした口調で）。上様！

勝頼（内膳の手を握りしめ）。内膳！

（東の空の端、かすかに赤くなり初める。左後方の幕の内より足輕一名出來り、勝頼の前に跪まづく。）

足輕（一通の書狀を勝頼の前に捧げる）。北の方様よりの御消息でムりまする（左へ退場）。

勝頼（受取つた書狀を急には開かうともせず）。そろそろ夜明け近くと相成つて來た。新たな日をば今なほ一度見る譯ぢやな。

新藏。草木や石や、それから山も、又川も、我等とちがひ、今後も毎日この様な美しい日を見て行くのぢやな。

信勝。かやうな草木や山川にも、我等は一同別れを告げ、暗い寂しい所へと、これか落て行くばかり。

麟岳。いえいえ、暗い所へなぞ決してお行でにはなりませぬ。まあ何として其様な――。

小助。でもこれだけ一同行くことゆゑ、心細くは少しもない。（と云つて自ら強ひて元氣をつけてゐる様子）。

忠五郎。とは云へ、かやうな山も川も、それから石も土くれも、ようく見ておき度いものぢや。

右近。早く夜が明けて呉れゝばよいと思うてをるに、又明けるのが惜しい様な氣もするわい。

勝頼（少年達が言葉を交へてゐる間に書狀を讀み終り、或る別な感慨を覺えて内膳を見てゐる。）

内膳（右近の肩に親しげに手をおき、少年達を傷々しげに打眺め、時々自分の顏をそむける）。

平左衛門（少年達に）なあに、もつと好い世界へ皆で行くのぢや。したがな、此世をも輕んじ侮りをる時は、惡い所へ落つるばかりぢや。それ故ようく見ておくがよい、山でも川でも、石ころでも何でも、もうそろそろ櫻も咲くであらう。（右後方を指差し）あの邊りにも一本ある、今少し夜が明ければ、あれも見えるぢや。

勝頼（内膳に）。これ、内膳、そなたは斯様に罪の無い少年どもが、最後の日をば待つてをる心の中を、ようく察して呉れをるぢやな。して又、然らば、尙ほも一層美しい矢張り最後の日の光りを、尙ほも一層切ない思で見度がつてをる或る娘の心を察して呉れ（短い間）、して又許しやつて呉れ、あの彌生を許して呉れ。

昌恒（内膳に對する輕い嫉妬を抑へゐる）。

内膳（少しはつとした心持で）。今に猶ほあの彌生殿が、御奉公をしてをられますかな？　ついまだ見かけも致さなんだが。

勝頼。此身がそなたに合せる顏がなかつた通り、彌生もそれで隱れたのぢや。戀慕なんぞといふものを今まで此身は知りもせず、又卑しめてもをつたれど、斯様な清い切ない願を（と書面を内膳に渡し）、もはや此身は斥くる事は相成らぬ。今までに時々内室が何やら此身に云ひをつた事もあつたが、これ程までにあの彌生は清い苦しみを嘗め續けて來をつ　か。たゞ一言「許す」と云つて呉れさへすれば、それでよいと書いてある。内室がさう書いてをる。

内膳（深い溜息をつく。無言。）

勝頼、たゞ其一言で、あの彌生には又とない美しい最後の一日が來るではないか。しかも幾時とも經たず、又直ぐ消え去る儚い一日ではないか。その光を彌生に見せてやつ　て呉れ。足輕（幕内より出來り、又勝頼の前に跪まづく）。北の方様のお見えでムりまする。（退場）。

（昌恒、常陸等、座をあける）

松の方（靜かに歩み來り、程よい所に腰をかける）。

彌生（松の方に續いて來る。顏は殆ど少しも羞恥を帶びず、寧ろ瞑想三昧に耽つてゐる様な表情。楚々とした體つきは松の方よりも氣高く見える位である。松の方の少し後ろに控へる。

内膳と視線が會ふ。其時も殆ど羞恥の色を見せず、たゞはらはらと落涙する。）

内膳（溜息をつくばかり。無言）。

松の方（勝頼に）。文をば差上げましたれど、ぢかに參つた方がよいと思ひまして。（内膳に）返辭を聞きに參りました。

内膳。拙者の心に宿れる女性は、今も、今後も、前月末に相果て申せしあの妻たゞ一人にムりまするわい。

彌生（目が昏んだ様な心持で倒れようとし、辛うじて自ら支へる）。

の方（悲痛の態。間）。では、たゞ彌生に、名を呼びかけて貰ひませう。せめてそれだけなり

松ともは……。

内膳。それは苦しうもムらぬぢや。彌生殿！

彌生（少し痙攣る様に肩のあたりを顫はし）。小宮山様、お懐かしうムりまする！

内膳（無表情。無言）。

松の方。まあ、何といふ六ケしい心であらう！

勝頼（内膳に）。まさか、そなたは、四年前の此身のあの亂暴極まる取裁きを、今なほ意地に持

つてをるではあるまいな。此の勝頼には兎も角もあれ、今此の無垢な心の唯一つの願ひをば、

そなたはさやうに蹈みにじつて、よく何ともないのぢやな？ 斯様な戀慕を、扱てもそなたは

以前の此身勝頼よりも、なほなほ輕く見くびりをるぢやな？

内膳。決して輕く思はねばこそ、別な返辭のしようがムらぬ。その代りには、彌生殿の心の中、

誰よりも拙者が深く思ひやつてをりますつもり。

松の方。そ、でまつて。その様に――まあ、何といふ嚴めしい心であらう。

彌生（顫えながら靜かに松の方を促す）。私、堪へられませぬ。彼方へ參りまする。小宮山様、

おさらばでムりまする。皆様、おさらばでムりまする。

内膳。彌生殿、おさらばでムる。

松の方（勝頼に會釋して、彌生の手を取り、憐みいたはりつゝ、共に靜かに左へ退場）。

（一同無言、いたはしげに見送る。）

勝頼（内膳を疎んずる様に）。嚴めしいばかりが武士の偉い所でもなからうぞ。

内膳。フン。言語道斷な貧苦を拙者と共にして、たうとう一歩さきに餓死してしまつたあの妻

を、よし誰が何と云はうとも、どうして此身が裏切らうぞ。今日は丁度二た七日に當つてを

る。（深い敬虔な態度で自分だけ合掌する）。

（一同又別な感慨に襲はれ、無言、たゞ深い溜息が口々より洩れる。）

勝頼。むう、さう云はるれば、一言もない。さやうな貧苦のどん底へ、其方達を突落せしは、

取りも直さず此の……あゝ此身は、もう我が名をば口にするさへ辛いわい。

内膳（勝頼の手を取り）。それはお互様に御同様。枕もとに相坐り、形だけの看病は致したとても、一刻も早く此の女房が死んでしまうて呉れぬものかと、……假にも思つた此の内膳でムるまいか。（短い間）その淺間しさ酷らしさは、又此の國の滅亡を氣味よく思ふ心と同然。虐げられた復讐と云へば一應聞えはすれど、扨て其の豫言が、註文が、愈よ着々的中して、斯うどん詰りと相成りみれば、フン、（一語々々の音を延べ、さも忌々しさうに）何とも云はれぬ氣持でムるぞ。（短い間。次第に常陸や昌恒等一同に向ひ、或る鬱とした心持で）その代りには、斯様な眞ツ黒な心を振り落してしまふ爲めばかりにも、今日の戰さは手緩くなどは致されませぬぞ。

常陸。（短い間）。烏賊の吐き出す汁さながらの、そのお言葉の眞ツ黒な心は拙者も有り餘るほど所持致せど、然らば貴殿がお手本を先づお見せ下さる格で、一つ大いに敵軍に放りかけてやつて下されい。あの先年の足助城攻め、あの時のお働き振りの程、なにとぞ今日もお見せ下され。我々とても、その放りかけ具合を肖かつて、奮戰激闘致さう所存。

（足輕一名座を立つて、左右に篝火を消す。はや空もン分明るくなつてゐるが、篝の消えた瞬間は、なほそれだけ急に暗くなつた事が感じられる。）

（幕の内より、他の足輕一名急ぎ登場。）

足輕（勝頼と内膳とに向ひ、口疾に）。松の方様よりお使として參じ申した。彌生殿は御自害をなされてムりまする。（退場）。

内膳。何ぢや。む、自害か。

勝頼。何、彌生が自害致した？　自害したとな？（内膳を促し、急ぎ行く）さ、參らぬか、これ内膳、そなたも參らぬか。

（勝頼、内膳、共に左の方の幕の内に入る。一同傷心、無言。殊に昌恒は人々と面を合せない様に、少し顔をそむける。）

麟岳（やゝあつて）。扨てもまあ、ふびんな事をしたものぢやなあ。

平左衛門。どうせ一同も、もうはや長く生きてはをらぬが、松の方様の御自害まで、彌生殿は待ちきれなんだと見えますわい。

常陸。此の少年達が待受けをる最後の此世の日の光も、彌生殿には苦しい重荷となるばつかり

で、詰りはそれに壓し潰されて相果てられた譯ぢやなあ。

（太陽はまだ上らないが、夜はもう殆どすつかり明けはなれる。）

貞村。今さき松の方樣と共に此處をば出て行かれる時、おさらばでムりますると云はれた言葉、あの云ひ振りが、拙者の耳には今なほはつきり殘りをる。あの樣に靜かな穩かな樣子であつただけ、あの胸中の悲しさ辛さ、愈よ思ひやられまするて。

昌恒（悲痛を强ひて抑へつゝ、一二度顏をそむける）。拙者は今まで誰人よりも多くお側に出てをつた爲め、あの彌生殿の事とても、大分詳しく承知してをりまするがな、あの四年前に小宮山殿と破談になられて以來は、なほも一層、心ばえでも氣立でも、それはまことに感心なものでムつたぞ。あゝ。まことにまことに良い娘御であつたになあ。

（遙か遠くの谷の方より、貝の音が聞え來る。間。）

（勝賴と內膳、幕の方より戻り來る。內膳の歩みは幾らか重い。後ろの山と山との間より日の光さし初める。邊りの草木も鮮かに匂ひ、露などが映えて、きらきらと輝く。）

勝賴（歩いて來ながら時々立止り、內膳を責める樣に）。そなたの心は餘りに嚴しい。ただ一言「許す」と口で云ふだけが。今日で二七日のその佛にも、何しに惡い事があるのぢや？

內膳（無言、無表情、たゞ溜息を洩らす）。

（貝の音また聞える。）

勝賴（座に着き）。これ、內膳、なぜ答へぬ。但しは後悔致してをるか。あの樣な心氣高い可憐な女に、あの樣な切ない思ひをさせて相果てさせたをば、口や言葉に盡くせぬ位ゐ、心の底より深く後悔致してをるか。いや、さうでない、後悔の色は少しも見えぬ。それは後悔の樣子でない。でも、そなたは……。

內膳（特に深い溜息をついて後）。扨ても扨ても。（嚙んで含める樣に云ひ聞かせる）ようムりまするかな、上樣、我國の此の滅亡は、抑も何がおこりでムるぞ？　天地自然の道理を輕んじ、つまらぬ威張りや負惜みをお續けなされた故の事、なあ、さやうではムらぬか。所でさやうな負惜み、扨てはくやしさ、なぞといふ汚い心は、をとこをんなの間に於ても、やつぱり同然。たゞ其の切ない願のきかるゝ迄が立派な心で。願が叶つた瞬間からは、直ぐさま卑しい小狡い甘い增長心を起しまするぢや。極く僅かにもせよ、それを起さずにはおきませぬわい。

これはまことに厭な事なれど、人間といふものが、我も他も、皆かやうなものなら仕方がない。(短い間)ところで上様、今日は總勘定の日でムるぞ。な、御合點が參りましたか、——。

(極度の嚴肅さで)で、あの女は立派な死に方を致しましたぢや。

勝頼以下一同(呆然として內膳を暫時見詰め居る。次第に或る重苦しい冥想が一同を襲ふ様な光景)。

(やゝ長い間。何處も一帶に尙ほ一層明るくなる。)

新藏(ぽつとした氣持で、山の端を眺め)。夜が明けた。綺麗な日の光ぢやなあ。

右近(右同様)。たうとう明けてしまうたなあ。

忠五郎(同)。愈よ最後の日となつたのぢや。

小助(同)。最後の今日である爲めに、何とも云はれぬ美しさぢや。山も川も、草も木も、石ころも……。

勝頼(再參深い溜息を洩らし、四方の景色などを貪る様に眺め)。此身が云ひかねてをる心の中を、少年どもはよくも自由にすらすら云うて呉るゝわい。あゝ、國土に對するまことの愛着も、此の勝頼の心には、今となつて初めて斯やうにしみじみと湧いて來るのか。いやいや此身も、七八歳の小兒の頃は、斯様に無垢な素直な心があつた様な氣持がするわい。それにしても、昨日から今日までの僅かの間に、(一語々々、音を延べて)何といふ種々様々な思ひを此身は辿つたやら!

(間。貝の音、次第に近く高く響く。)

一同(本能的に今更の様な恐怖を覺え、顏と顏とを一寸見合せなどするが、それは次第に絶望的な勇氣を孕み來る。谷を見おろして腕を扼する者、太刀を拔いて反りを見る者、それを二三度振つてみたりする者、弓弦の張りを檢めてみたりする者などがある。)

平左衞門(卷いてあつた旗を解き、程よい所にしかと植てる。旗は勇ましく朝風にひるがへる。)

內膳(少年達の傍へ歩み行き、片手を新藏の肩におき、憐む様な勵ます様な表情で、少年達一同をぢつと見る)。さ、よいかな。

少年達一同(電氣を感じた様に身中の勇氣を呼び起され、吃とした目を擧げて、內膳に無言の答を與へる)。

常陸。愈よどん詰りの修羅の日ぢや。(以下一同の語調にも様子にも、大きく深く抑へつけた痛憤の氣が漲る)。

貞村。四百年來、先祖より受繼ぎ來つた一切の願ひも夢も、今日で愈よ皆無とはなるか。

平左衛門。しかも國内に敵が踏み込み參つてから、まだ十日とも經たいでなあ。

昌恒。して又、どうせ萬事に上様と五十歩百歩の織田徳川が、いやさ、今は我々一同より遙かに劣る織田徳川が……

麟岳。文も武も無き織田徳川が……

昌恒。貞村。したり顔して後をば取るか！

勝頼(新たな奮激を覺え。)何？　彼奴等に取らせて堪るかッ！

内膳(につこり笑ひ)。ところで上様、あの貝の音や鬨の聲を、何とお聞きになりまするかな？

敗殘の其方どもが如何にじたばた致さうとも、はや我々の娯みがてらの獲物であるぞと、罵り笑ふも同然な音を立てはやし攻上るではムらぬか。

平左衛門。何？(つかつかと進んで谷を見おろし太刀の反りをりんと打たせ)。フン、續くわい、續くわい、東に致して蹴散らすには、誘へ向きの行列ぢや。(顧みて一同に)さ、おのおの方、又の世で佛の性にならう爲め、慘忍性の有りツたけ、今日で使つてしまひませうぞ。

(貝の音なほ高く、鬨の聲も聞え來る。)

貞村。生涯絶へず渦卷き返る愛憎我執の命の火、今我々は此の一日で、何の惜しみも遠慮もなく、燃え盡させてしまはるゝぢやな。斯様な愉快が又とあらうか。これは死の鰐口のまん前に、一時に斯うして投げ出された我々のみの特權ぢや。

内膳。なあに、燃えても燃えても燃えつきぬ業の烈火を燃やすのぢや。今日は最後の修羅の日でなし、最初の其日ぢや、その入口ぢや。して又もしも、大安心の和平が果して我々にも、得らるゝ筈であるならば、それは極度に荒れ狂ふ修羅の巷の外にはないわい。

(内膳は緩りと大股に歩いて行つて、木の股に立てかけてあつた大身の槍の鞘を拂ひ、谷を見おろす。その穂先きに、又平左衛門や昌恒等の槍や太刀の刃に、會ふ日の光まぶしいまでにきらりと跳る)。

常陸。素よりさやう。(折から丁度東の空の横雲が全く斷れ、血の様な光を射放ちつゝ昇る太陽

を指差し)、和平を齎らす大日輪の、あの燃えさかる奮闘の姿はどうぢや！　殊に今日は如何なる譯か、あの様な眞つ赤な色をして、まるで、今日流さるゝ血の海に、あらかじめ醉ひをる様な火の心！　おう！(と稍や狂ほしく深く笑ふ)。

(貝の音愈よ近く、鬨の聲次第に高く、旗差物の先きもちらちらと見えそめる。一同、身内より刻々に働き出ようとする奮躍の氣を、尠からぬ努力で抑へてゐる。――幕靜かに靜かに下る。)

――をはり――

亡國行
定價一圓二十錢

大正十三年十月三十日印刷
大正十三年十一月十日發行

著者　中島清　東京市牛込區横寺町四十三番地
發行者　後藤誠雄　東京府下戸塚町下戸塚二百四十番地
印刷者　内田廣藏

發行所　東京市牛込區横寺町四三　聚英閣　振替東京四七八六九番　電話牛込四六二番

戯曲書類

著者	書名	定價	送料
長田秀雄著	亡き妻を哭く	一、五〇	一五
中島清著	亡國行	一、二〇	一五
大坪草二郎著	大海人皇子	一、八〇	一七
モリエール作 井上勇譯	ドン・ジュアン	二、三〇	一八
ボオマルセエ作 井上勇譯	フィガロの結婚	二、二〇	一七
グリルパルツエル作 山本重雄譯	悲曲サッフオ	一、四〇	一三
ストリンドベリイ作 福田久道譯	基督	一、〇〇	一五
秋田雨雀序 藤江勝譯	シング戯曲全集	二、三〇	一八
ゴーリキー作 秦豐吉譯	太陽の子	一、四〇	一五

529
137

終